

愛媛大学医学部 同窓会会報

2024 NOVEMBER No.40

発行日／令和6年11月1日
編集発行人／鍋加 浩明
発行／愛媛大学医学部同窓会
〒791-0295
愛媛県東温市志津川
TEL (089) 960-5989
印刷／太陽印刷株式会社
TEL (089) 932-2881



表紙紹介

1985年3月「7期生卒業写真」

CONTENTS

新会長挨拶	2
医学部創立50周年事業報告	3
卒業生からのメッセージ	4
新任教授からのメッセージ	6
退職教授からのメッセージ	8
恩師をおたずねします	11
愛媛大学医学部同窓会会則 細則 申し合わせ事項	11
第40回総会報告	13
50周年を終えて、7期生雄志座談会	14
海外医療研修に参加して	19
医学祭を終えて	21
役員一覧	21
同期会報告	22
支部紹介	23
お知らせ	24



第7代同窓会長就任のご挨拶

鍋加 浩明 (平成16年卒、26期生)

松山大学 薬学部 医療薬学科 教授

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様こんにちは。薬師神芳洋先生の後任として同窓会長に選任されました鍋加(なべか)浩明と申します。よろしくお願いいたします。

歴代の同窓会長をご紹介させていただきます。初代会長朴信正先生(昭和57年～)、第2代会長櫃本泰雄先生(昭和62年～)、第3代会長鳥居本美先生(平成3年～)、第4代会長西尾俊治先生(平成5年～)、第5代会長高田清式先生(平成11年～)、第6代会長薬師神芳洋先生(平成29年～)となります。長い歴史に身の引き締まる思いです。

私は2004年(平成16年)卒業の26期生となります。在学中にスタンフォード医療研修の際に同窓会より援助をいただきましたのが同窓会との最初の接点かと思います。また、6年生時には解剖実習室と図書館の間に新築されました総合学習棟で国家試験の勉強をさせていただいた最初の学年となります。総合学習棟建設には同窓会のみならず、各講座からも多大なる援助があったと聞いております。その節はどうもありがとうございました。

私が卒業した2004年は卒業臨床研修が必修化された最初の年でもあります。私は松山赤十字病院で2年間のスーパーローテート研修を行いました。その後、麻酔科レジデントとして勤務する傍ら旧第1解剖学(松田正司教授)の大学院に入学しました。学位取得後は助教の職をいただき、旧第1解剖学講座教員として、大学2年生の解剖実習で多くの後輩を指導して参りました。大学院卒業と同時に同窓会役員を拝命し以後17年間、同窓会の運営に微力ながら協力させていただいて参りました。私は主に同窓会Webページ、Facebookページ、同窓会総会のWeb配信を担当させていただきました。対面参加できない同窓生のために来年度以降も同窓会総会はWeb配信とのハイブリッド開催としたいです。

2022年にご縁があり、愛媛大学医学部生体構造医学講座准教授から松山大学薬学部生理化学研究室教授に異動しました。城北キャンパスの横にあります松山大学は薬学部以外全て文系学部であり、薬学部のみならず全学にも医師教員は私だけという新天地で日々奮闘しております。薬学生には主に病態・薬物治療学を教えており、愛媛大学医学部客員教授として引き続き医学生の実習の指導にも携わらせていただいております。

前任の薬師神芳洋先生は愛媛大学医学部創立50周年式典を大成功に納められた他、愛媛大学医学部創立50周年記念事業・後世に残る記念事業WG長である羽藤直人先生、寄附・募金WG長である日浅陽一先生らとともに50周年記念総合学習棟(同窓会館)(仮名)の着工への道筋を作ってくださいました。一同窓会員として感謝の気持ちしかございません。

私は先輩方の築かれてきた医学部同窓会をより盛り上げていきたいと思っています。2年後の同窓会総会は新築の同窓会館で実施したいと考えておりますが、現在の8月第一土曜日が三津浜の花火大会と同日であることもあり、同窓生の参加しやすい日程への変更を今後考えていきたいと思っています。

また、同窓生総会への参加を促し、医学部同窓会を大いに盛り上げていくため、それぞれの学年について学年幹事を指名させていただければと思っています。これまでに同期会の幹事をされ、この同窓会報に寄稿していただいた方を中心にお声掛けさせていただきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

同窓会副会長には須賀義文先生(26期生)と中林ゆき先生(36期生)のお二人を指名させていただきました。須賀義文先生は松山市で開業されております私の同級生で、開業医の立場からご協力をいただきます。中林ゆき先生は愛媛大学医学部法医学教室の助教をされております。学部学生、大学院生時代から共に研究をして参りました。これらのメンバーで若い世代への同窓会参加も促していければと思います。

8月の同窓会総会では規約がいくつか変更され、卒業20年までは毎年同期会の援助が出せるようになりました。これまでは2年に1回でした。若い先生方の同期会開催を後押しし、そして同窓会総会にも参加する流れが作れればと思っています。

現在、愛媛大学医学部同窓会には5つの地方支部がございます。九州支部、中国支部、近畿支部、東日本支部、東海・中部支部です。今回の規約変更で新たに支部総会への援助が出せるようになりました。卒業後や2年間の初期研修終了後のタイミングで研修医の異動が多い時代です。各支部と連携し、他地区へ異動された若い先生のサポートをお願いするとともに、各地区での同窓生の親交を深めていただきたいと思います。そして皆様お忙しく中々愛媛に戻られる機会は少ないかと思いますが、同窓会総会への参加をお願いしたいと思います。

私たちの母校は長い歴史と伝統を誇り、多くの優れた人材を輩出してきました。その一員として、この歴史の一端を担うことができることに、深い感謝と責任を感じております。これからも皆様と共に母校の発展と同窓生の絆を深めるために尽力して参ります。

まだまだ若輩者で、皆様のご協力が不可欠です。愛媛大学医学部同窓会Facebookページ (<https://www.facebook.com/groups/ehimedoso/>) などを通じてご意見を頂戴できればと思います。今後ともよろしくお願いいたします。



愛媛大学医学部同窓会
Facebookページ



愛媛大学医学部創立50周年事業報告

羽藤 直人 (平成元年卒、11期生)

愛媛大学大学院医学系研究科長・愛媛大学医学部長
愛媛大学医学部創立50周年記念事業 実行責任者

愛媛大学医学部は、2023年9月29日に創立50周年の節目を迎えることが出来ました。50周年記念事業に際しましては、同窓会の皆様にも多大なるご支援を頂き、愛媛大学医学部長として、また愛媛大学医学部50周年記念事業の実行責任者として、心より御礼申し上げます。

記念事業は、2021年6月「医学部創立50周年記念事業実行委員会」の立ち上げから始まりました。広報・市民公開講座WG、記念式典・記念祝賀会WG、後世に残る記念事業WG、寄附・募金WG、記念誌発行WGを設置し、各WG長・委員の先生方には多大なるご尽力を頂きました。



医学部創立50周年記念事業実行委員会の左から
広報・市民公開講座：浅野水辺、記念式典・記念祝賀会：薬師神芳洋
寄附・募金：日浅陽一、後世に残る記念事業：羽藤直人
記念誌発行：大澤春彦

広報・市民公開講座WGでは、専用ホームページの開設、ロゴマークの公募作成、記念グッズの作製、「市民公開講座」の開催(2023年8月20日、いよてつ高島屋ローズホール)を実施いたしました。また、2023年9月29日には、重信キャンパスの40周年記念講堂にて、高田清式先生と熊木天児先生による学生への講演を中心に「医学部創立記念日イベント」を開催、10月6日には安川正貴先生のご尽力により道後ふなや旅館にて「名誉教授の会」を開催し、多くの名誉教授の先生方にお集まりいただきました。

記念式典・講演会・祝賀会は、2023年10月7日にANAクラウンプラザホテルにて挙行いたしました。記念式典には同窓会員を始め、これまで愛媛大学医学部の発展を支えて頂いた多くの関係者のご臨席を賜り、式辞、学長挨拶、御来賓の祝辞に加え、須田正巳初代医学部長が作詞され大橋裕一前学長が作曲された「愛媛大学医学部創設歌」が初披露されました。50周年の節目に相応しい素晴らしい楽曲となっております。医学部HPからご視聴いただけますので、是非ご確認ください(<https://www.m.ehime-u.ac.jp/sing/>)。

記念講演会では、志水太郎先生(獨協医科大学総合診療医学主任教授、27期生)による「診断の質を高めるには？」および、富永真琴先生(理学研究所細胞生理研究部門/生命創成探究センター教授、6期生)から「カプサイシン受容体発見から温度感受性TRPチャネル研究に携わった26年」の素晴らしいご講演を頂きました。

記念祝賀会は、杉山隆附属病院長、松山市長、東温市長のご挨拶、鏡開き、乾杯の後、歓談、様々な余興が供され、薬師神芳洋同窓会長の閉会挨拶、「エイ、エイ、オー」掛け声で幕を閉じました。愛媛大学医学部100周年へ向けた、新しい門出に相応しい祝賀会であったと思います。コロナ禍での企画であり、同窓会員の方々全てには、お声がけができなかったことをお詫び申し上げます。当日の様子を、YouTube動画でご視聴いただけますので、是非ご確認ください。



お祝いの鏡開き



研究科長 羽藤直人 挨拶 記念講演会演者のお二人



同窓会長 薬師神芳洋 挨拶

また、医学部創設から50年間の歴史を沢山の写真と共に綴った「医学部創立50周年記念誌」を発刊するとともに、「医学部50周年記念寄附金：約2億5千万円」を集めさせて頂くことが出来ました。多くの同窓会の先生方からも、多額のご寄付を賜り心よりお礼を申し上げます。お陰様で、「未来の愛媛大学医学部を発展させる次世代の若者育成強化事業」を順次遂行しております。本記念事業は、重信キャンパスで学ぶ学生達の修学・活動環境を整備することで、愛媛大学医学部の輝かしい未来の実現を目指す取り組みです。まず、サークル支援(ダンス部・剣道部へ体育館鏡、邦楽部・吹奏楽部へ楽器、軟式・硬式テニス部へ防風ネット、卓球部へ卓球マシン)に約400万円支出いたしました。また、医学科6年生の学習棟の空調改修工事に、約600万円使用させて頂いております。

これから本記念事業の核となる「50周年記念総合学習棟」を、医学部同窓会との共同プロジェクトとして築造する予定です。本施設は令和7年度末までには完成予定で、学生や教職員が有効活用できる建物となる予定です。同窓会事務局も本施設内に移転、ご寄付頂いた方々の銘板も設置予定ですので、お近くにお寄りの際は是非お立ち寄りください。

次なる50年へ、更なる飛躍を目指す愛媛大学医学部に期待ください。



YouTube
動画



小山 忠明 (平成3年卒・13期生)
(関西医科大学 医学部 心臓血管外科学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、令和5年4月1日付けで関西医科大学心臓血管外科主任教授に就任しましたのでご挨拶申し上げます。私は1991年（平成3年）に愛媛大学を卒業後に京都大学心臓血管外科へ入局しました。1年半の研修の後、広島平和公園の目の前にある土谷総合病院へ赴任し6年間勤務しました。ここでは院長兼部長と私と広島大学からの派遣医師の計3名で数多くの症例を経験することができ、心臓血管外科医としての基本骨格を作ることができました。その後京都大学大学院へ入学し、当時注目を浴びていた拡張型心筋症に対するパチスタ手術（左室形成術）に関する研究を大動物（犬）で行いました。心尖部温存術式が心機能改善に有効であることをアメリカ胸部外科学会で発表し、卒業までに学位を取得することができました。大学院卒業後は1年間大学で助手として勤務した後にトロントのサニーブルック病院ヘリサーチフェローとして留学しました。ただ、留学後1カ月で教授から東京で相当数執刀できるポジションに私を推薦したいとのメールが届きました。赴任は遅くとも1年後ということで悩みましたがその要請を受け入れ1年後に東京の新葛飾病院に心臓血管外科副部長として赴任し、そこで初めて独立して心臓の手術を始めることとなりました。赴任から3年後に病院の循環器部門が独立してイムス葛飾ハートセンターという新たな病院を設立し、その初代心臓血管外科部長として3年弱勤務しました。手術症例数も順調に増え外科医として充実した日々を過ごしていましたが、京都大学から神戸市立医療センター中央市民病院への異動要請があり、東日本大震災直後の2011年4月に神戸に異動しました。赴任後3年目から部長として計12年間勤務し約3000例の心臓大血管手術を執刀しました。在任中は愛媛大学心臓血管外科で行われていた人工弁の生体弁劣化メカニズムの研究で協力することもできました。2022年に関西医科大学心臓血管外科の次期主任教授への推薦のお話を頂き現在に至っています。自分が教授職に就くとはまさに夢にも思っていませんでしたが、着任してみるとこれまではほとんど関わらなかった学生教育という分野のウェートが大きくなり、仕事の違った面白みを感じています。心臓血管外科では愛媛大学出身者が数多く活躍していて私としては色々な場面で協力していただき助けられています。今後も同窓の若い先生方が活躍されるのを楽しみにしていますし、できる限りのサポートをしたいと思っています。今後とも宜しくお願いします。



井上 勝次 (平成8年卒・18期生)
(愛媛大学大学院医学系研究科 地域救急医療学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、2023年12月より愛媛大学地域救急医療学講座教授を拝命しました井上勝次（いのうえかつじ）と申します。本講座は戦略型寄附講座として市立八幡浜総合病院内にサテライトセンターを設置し、八西（はっせい）地区における地域医療の実践、医学生・若手医師の教育および臨床研究を行っています。八西地区は、愛媛県の西沿岸部に位置し、美味しい柑橘や新鮮な魚がとれる自然豊かな地域です。私は愛媛県西予市三瓶出身で、八西地区は幼少期から八幡浜高校卒業まで成長させていただいた故郷です。本講座の着任は貴重なご縁と感謝しております。

私が幼少期の頃、地方祭などのイベントの際には、親族だけでなく、知り合いの方たちと自由に食事やお酒を交わし、平日は山仕事、漁業などの仕事に汗を流し、子供達は山や海で自由な遊びを発掘するなど人と人との交流が密でcreativityの高い環境で育ちました。現在は、情報ネットワークやAIの普及によりすぐに情報を得ることが出来る便利な生活が可能ですが、一方で人と人との交流が希薄となり、心身的に窮屈な社会になっていると感じております。

地域医療は、医師不足や最先端の治療が受けられないなどネガティブな面が強調されがちですが、地域医療は医療の原点と考えています。私自身、幼少期の頃に立ち返り、人と人との関係を大切にして診療を行っていきたいと思っています。これまで医師として様々な経験を積ませていただきましたが、今も患者さんの診断や治療に悩む毎日です。市立八幡浜総合病院スタッフと互いに悩みながら最善の治療を届けることが出来るようチームで診療を行っていきたいと思っています。そして、若い先生たちが働く充実感が得られるよう、診療技術の取得だけでなく、患者さんと向き合う診療のサポートを行ってまいります。

現在取り組んでいることの一つとして、一般住民を対象とした市民講座の準備を行なっています。一度病気になると元の状態に戻ることが難しい病態の一つが心不全です。年齢が重なっても生き生きした生活を送ることが出来るよう、予防医学の重要性を伝えていきたいと思っています。

微力ではございますがこれまでいただいたご恩に少しでも恩返しができるよう努力してまいります。同窓会の先生には引き続きご指導、ご鞭撻をいただけると幸いです。今後ともよろしくお願い申し上げます。



竹下 英次 (平成8年卒・18期生)

(愛媛大学大学院医学系研究科 地域消化器免疫医療学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、2024年4月1日付けで地域消化器免疫医療学講座教授を拝命致しました竹下英次（たけしたえいじ）と申します。同窓会会員の皆様にはいつもお世話になっており、この場をお借りしまずは御礼申し上げます。

私は愛媛県南予の西宇和郡瀬戸町（現伊方町）出身で、愛媛県立八幡浜高等学校に進学以降は一人暮らしですが、現在に至るまでずっと愛媛県内過ごしております。愛媛大学には、1996年に第三内科（消化器・内分泌・代謝内科）に入局し研修医として、2001年から大学院生として、2014年からは光学医療診療部に在籍しておりました。2016年からは、地域消化器免疫医療学講座に異動、当講座教授を兼任された消化器・内分泌・代謝内科学主任教授である日浅陽一先生のもと准教授として研鑽を積んでまいりました。

地域消化器免疫医療学講座は、西条市の寄附講座として2016年に開設され、業務としては、大学での業務の他、西条市での活動（診療支援、市民健康啓発等の業務）も行っております。教授を拝命したからには、これらの活動を通じて診療・研究・教育への貢献をしてゆきたいと思っております。

教育に関しては、自身の学生時代を振り返るとあまり多くは語られませんが、学部学生～若い先生への教育においては、やはり基礎医学・臨床医学、専門分野にかかわらずまずは興味・関心をもってもらうことが大事であると考えます。現在、自身が行っている消化器内視鏡治療（消化管癌、食道静脈瘤に対する内視鏡治療等）を通じて、学部学生にはその可能性や面白さを、若い先生へはさらに治療の実践による達成感を味わってもらえるように今後も指導してゆきたいと思います。

さらに当講座の柱のひとつである炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病）についても様々な取り組みを行っております。コフォート研究では炎症性腸疾患診療の現状における課題の抽出とそれに対する解決策の提案をしています。基礎研究では、潰瘍性大腸炎に対する安全な治療を目指して、炭酸脱水酵素I（Carbonic anhydrase I：CA I）に注目し、新規治療薬としての開発を目指し研究をしております。CA Iの研究は学位取得や研究医の育成・指導にもつながるものと考えております。

これらの活動を通じて、西条市、愛媛県、そして愛媛大学医学部へ貢献してゆきたいと思っておりますので、愛媛大学医学部同窓会の先生方におかれましては、引き続き益々の御指導御鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



長阪 一憲 (平成12年卒・22期生)

(帝京大学医学部 産婦人科学 教授)

愛媛大学医学部から学んだこと
皆様、大変ご無沙汰しております。

私は1994年に愛媛大学医学部医学科に入学して6年間お世話になりました。私の本籍は兵庫県龍野市でして、育ちも東京、富山、山梨、米国テキサス州と幼少期より転々と生活しました。今振り返ると、愛媛は間違いなく私の第二の故郷となりましたし、愛媛大学医学部在学中の経験は全て、自分の人生に大きな影響を与えてくれたのは間違いありません。

入学時は、学籍番号が近かったこともあって、まず仲良くさせていただいたのは、同窓会東日本支部でもお世話になっている西井 鉄平君（22期）でした。西井君は学究肌の人であり、研究室配属（薬理学 前山 一隆教授）で一緒にさせていただき、そこで私は細胞培養やピペッティング操作などを学びました。

所属した部活動はラグビー部でして、感謝してもしきれないほど、同期（同志）の白戸 玲臣君（22期）を中心に、非常に多くの先輩、後輩に恵まれました。自分は球技が下手なので、スクラムといった接戦に強くなりたく練習に打ち込んでいました。今は完全に元に戻りましたが、当時は筋肉で体重が30kgプラスされた体でした。練習はハードでしたが、笑いと涙が耐えない日々が楽しかったですし、カッコいい先輩が多かったので、西医体に出場したくて、ひたすらラグビーをやりつつも、1年時から（たぶん）しっかり勉強はしていました。解剖学、病理学、生化学、生理学といった基礎講義は、いずれも聞いていて好奇心を駆り立てられましたし、分子病理学 植田 規史教授の病理標本スケッチ授業は特に面白く、組織ごとの細胞構造、細胞器官を知ることができました。現在は細胞レベルからトランスクリプトームといった微細な遺伝子発現まで研究しておりますが、当時学んだことが基盤となっています。

卒後は悩んだ末に、愛媛を離れて東京で研修を始めました。産婦人科医として早く一人前になろうと、エンドレスのランパスのように走り続けてきました。どんなお産でも1人で取れるようになりたかったので、病院に泊まり込む日々を過ごしましたし、暇を見つけては他の病院にいつて手術見学をしました。臨床だけでなく、研究も必死でやろうと思って、学位取得後は、国際学会で感銘を受けた先生のところで基礎から研究を学びたく追いかけてきました。アジアからの無名研究者のことなど彼は知りませんので何度も断られましたが、努力してグラントを取り、そこで研究留学（勉強）をさせていただきました。臨床も研究も絶対に一人前になるんだという意思と覚悟だけで、走り続けてきました。

帝京大学では、愛媛で学ばせていただいた医学、これまでの人生経験を糧にして、医学生、後輩の指導をしています。そして何よりも産婦人科という学問が好きになって、今に至っています。どこまでやれるかわかりませんが、まだまだ頑張り、倒れるまで走り続けます。今後ともご指導のほど、よろしくお願いいたします。

卒業生からのメッセージ



岡本 渉 (平成14年卒・24期生)
(広島大学病院 がん化学療法科学 教授)

2023年10月1日付で広島大学病院がん化学療法科教授を拝命いたしました岡本渉と申します。この度は御挨拶の機会を頂き、心より感謝を申し上げます。私は1996年に愛媛大学へ入学しましたが、当時は所属していた軽音楽部・山岳部・バスケットボール部といった学問以外の活動に励んでいた記憶しかなく、お恥ずかしい限りです。2002年に大学を卒業した後は、当時恩地森一教授が教室運営をされていた第三内科（現：消化器・内分泌・代謝内科学）で1年間の大学病院研修をさせて頂いた後、消化器・一般内科医として市中病院で勤務をさせて頂きました。その後、腫瘍内科医を志すことを決め、2006年より近畿大学医学部腫瘍内科、2013年より国立がん研究センター東病院で消化器領域を中心としたがん薬物療法の診療や基礎・臨床研究にあたりました。2019年4月からは広島大学病院がん治療センターで原発不明がん・希少がん・消化器がん・バイオマーカーに基づく臓器横断的がん薬物療法の診療・研究やがんゲノム医療体制整備等に携わり、2023年4月に同院がん治療センター長および化学療法室長、同年10月にがん化学療法科教授を拝命いたしました。愛媛にいる間は、同級生や先輩・後輩、第三内科の皆様をはじめ多くの方々に大変お世話になりました。中四国を離れている間は、同窓の先生方と御一緒する機会が少なかったのですが、出会うことがあると先輩・同期・後輩に依らず励まされました。広島へ来てからは、愛媛大学に所縁のある先生にお世話になる機会が各段に増え、広島大学や広島の医療機関でも、私が学生時代に教鞭をとられていた河野修興先生（広島大学名誉教授）や濱田泰伸先生（前広島大学医学部保健学科長）をはじめ、多くの先生が活躍されており、大変心強く思っております。若い時には御縁や御恩の大切さを十分認識できていなかったと思いますが、恥ずかしながらこの頃になってやっと多くの皆様に助けて頂いていることに気が付いております。この場をお借りしまして、お世話になりました全ての先生方に心より御礼を申し上げますと共に、今後とも御指導・御鞭撻を賜りたく、何卒お願いを申し上げます。

新任教授からのメッセージ



押切 太郎 (特別会員)
(愛媛大学大学院医学系研究科 消化管・腫瘍外科学 教授)

2023年8月1日付けで愛媛大学大学院医学系研究科消化管・腫瘍外科教授に就任した押切です。

私は愛知県で生まれ、北海道大学で医学生教育を受けました。卒業後12年間は北海道大学第二外科、その後17年間は神戸大学食道胃腸外科に所属し、大学および各関連施設で研鑽を積んで参りました。現在の専門は食道疾患、とりわけ食道癌の低侵襲治療（胸腔鏡手術、ロボット支援手術）になりますが、食道癌診療に関わり始めたのは15年程前からで、それまでは肝胆膵疾患、胃・大腸疾患、腹部急性疾患と幅広く手術治療に携わってきました。世代的には何でもやっていた時代の最後の世代かと思いますが、現在は各領域の専門化もすすんできましたが、若手外科医にはぜひ一般外科と専門領域をバランスよく両立して欲しいと思います。

当科は上部消化管外科、下部消化管外科、小児外科の3分野で構成されており、各領域において良性疾患から悪性腫瘍まで幅広く対応するべく、専門スタッフが日々診療に従事しています。上部・下部消化管領域では複数機種の手術支援ロボットの導入と症例蓄積が進み、より患者さんに負担の少ない外科治療を心掛けています。また手術前後の化学療法も自科で行っており、悪性腫瘍に対するシームレスな集学的治療を提供できるのが強みです。小児外科でも内視鏡手術を広く導入し多岐にわたる疾患に対応しており、愛媛の医療に貢献していければと思います。

ご存じのように愛媛県は人口約130万人のうち51万人が松山市に集中しており、先進医療と並行して地域医療を支えることが大学の使命のひとつになっています。日本の人口減少と少子高齢化がすすみ、2040年にはこういった問題が表面化するといわれるなか、今後やっていくべき地域医療は地域の中小規模病院に小人数を分散配置することではなく、こういった病院の統合と医療スタッフの集約化ではないかと考えます。これは単科の教室でどうにかなる問題ではなく愛媛大学全体で一体感を持って取り組むべき課題であり、真の地域医療に向けて微力ながら貢献できればと考えますので、今後ともよろしくお願い致します。



榎田 祐三 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科 肝胆膵・乳腺外科学 教授)

令和6年4月1日付で、愛媛大学大学院医学系研究科 肝胆膵・乳腺外科学講座 教授に着任しました榎田祐三と申します。

私は、平成11年に鳥取大学を卒業後、岡山大学第一外科（現 消化器外科）に入局し、初期研修医として東予市の公立周桑病院に赴任しました。周桑病院では、診療科の垣根を越えて愛媛大学の先生方に変更可愛がって頂き、愛媛県における地域医療の現状とニーズを肌で感じることができました。目の前の患者さん一人一人に向きあい寄り添う姿勢は、この愛媛の地で生まれ、今日まで外科医の礎となっています。国立岩国病院での後期研修の後に岡山大学へ帰局し、肝移植のほか、進行がんに対する血管合併切除や体外循環を駆使した拡大手術の手術修練に勤しむこととなりました。平成20年には米国Nebraska大学へ留学し、脳死肝移植や小腸・多臓器移植、進行がんに対する体外切除/自家移植といった挑戦の手術の修練にも恵まれました。そして近年は、低侵襲のロボット支援下肝切除・膵切除にも力を入れております。

外科医としてメスの可能性を追求する一方で、その限界を知ることになったことも事実です。こうした限界を越えていくため、「臨床に直結する研究」として、遺伝子変異情報を基盤にがんの集学的治療戦略を策定する「Precision medicine」を研究の柱に据えました。また様々な臨床課題に対して多施設共同研究を行う臨床研究コンソーシアムを立ち上げ軌道に乗せています。今後は、愛媛大学・関連病院とで研究スクラムを組み、愛媛から全国・世界に向けた情報発信とエビデンス創出を目指していきます。

周桑病院に始まり、外科医として走り続けて四半世紀が過ぎましたが、まだまだできること、やるべきことがあるはずと考える日々です。目の前、未来の患者さんに何ができるのか、そして次世代を担う後進に何を遺していけるのか、臨床・研究・教育に心血を注ぐ覚悟で、この度の着任にいたしました。勇気と真心を持って患者さんに向き合い、最高の外科医療で患者さんに希望と未来を与えることができる、そんな外科医を育てていくことが私の責務と気を引き締めしております。愛媛大学医学部同窓会の皆様方におかれましては、ご指導ご鞭撻を賜りますようどうかよろしくお願い申し上げます。最後に、愛媛大学医学部が未来に向けて更なる発展と飛躍を遂げていくことを心より祈念し、就任のご挨拶とさせていただきます。



西原 佑

(愛媛大学大学院医学系研究科 麻酔・周術期学 教授)

愛媛大学大学院医学系研究科麻酔・周術期学教室5代目教授に就任いたしました、西原 佑と申します。愛媛大学医学部同窓会の皆様には、いつも大変お世話になっております。

私は愛媛県伊予市に生まれ、松山東高等学校を卒業した後、香川医科大学（香川大学医学部）に入学いたしました。2005年、卒業と同時に地元である愛媛県に戻り、県立中央病院、愛媛大学医学部附属病院での初期研修を経て、麻酔・周術期学教室に入局いたしました。当時はまだまだ麻酔科医が少なく（今でもまだ不足してはおりますが）、愛媛県内の麻酔・手術の需要に追いつかない状況でした。愛媛大学麻酔科はそのような中でも研究分野の再活性化を図るべく、大学院に入学させてくださり留学までさせていただきました。この采配のおかげで現在の私があります。愛媛大学の麻酔科は、どれだけ苦しい状況でも将来のための投資はやっていくということが、この頃からの方針となっており、同じ医局員が頑張っている限り、みんなでそれを応援し、支えていこうという、そういった暖かい風土があるように思います。

今回、私は21年間という長い期間をいただきました。愛媛県の麻酔科医を増やし、医局員にとっては各個人一人一人が麻酔科医としての実力を上げ、愛媛県民にとっては安心してどこでも手術が受けられる、そういった環境を提供していけるようにするための十分な時間をいただいたと思っています。そのためにも、研究はこれまでと同様に、より活性化を図るべく大学院への入学はもちろんのこと、海外留学も推奨し、臨床では各専門的な分野におけるスペシャリストを育成すべく、国内留学を推奨していきます。自分の勉強したい事、自分が将来どうなっていきたいのか、医局員一人一人が将来に対する明確な夢を持ち、一人一人それらを叶えていけるよう、医局が応援をしていきます。このことは必ず将来の愛媛大学、そして、愛媛県へと還元されていくと考えています。

まずはその第一歩として、学部学生の教育をしっかりと行い、麻酔科に興味を持ってもらえるような講義・実習の体制を整えていきます。「愛媛の周術期医療を支えるために麻酔科を発展させる」これが私に与えられた使命であると認識し、21年間の業務に取り組んでいきたいと思っております。

今後とも同窓会の先生方には、ご指導ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

新任教授からのメッセージ



森 宏仁 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科 先進消化器内視鏡開発学 教授)

愛媛大学医学部同窓会会員の皆様、はじめまして。2024年4月1日より愛媛大学大学院医学系研究科 先進消化器内視鏡開発学の教授を拝命いたしました森宏仁と申します。本講座は、消化器疾患の中でも最も多い食道癌・胃癌・大腸癌さらに肝胆膵癌に対する内視鏡的アプローチによる根治切除や既存の内視鏡治療のさらなる低侵襲治療、いわゆるendoscopic microsurgeryへの発展を新規内視鏡機器開発を通じて実現し、世界に通用する先進内視鏡機器の開発を行っていくことを、その根幹としています。

私は、1996年に徳島大学医学部を卒業後、主に徳島県、香川県を中心に消化器内科および消化器外科を中心に研鑽を積んで参りました。2009年に香川大学医学部 消化器・神経内科にお招きいただき、講師として12年間、大学で教育・診療・研究を行って参りました。その後、4年間、愛媛労災病院 消化器センター長として臨床に携わりながら、聖マリアンナ医科大学 消化器・肝臓内科の客員教授として研究も継続しておりました。このたび、愛媛大学 消化器・内分泌代謝内科学教室の日浅先生のご尽力で本講座の開講となりました。

本講座では、消化器領域でのアイデア創出から特許化、そして創薬・機器開発・製品化など産学官・医工連携による横断的研究および活動であり、ボーダーレスなグループとして、Project IAEA-e (Innovative and Advanced Endoscopy Associates-ehime) として産声を上げました。これらの研究はもちろん実臨床や教育にも直結していなければならない、教育面においても、アイデア創出のために医学生及び大学院生を対象に低侵襲内視鏡治療を基本理念とした消化器領域の新規的・横断的でありながらも、特許・商品化などの医学・医療経済的側面の教育・診療・研究も行っていきたいと思います。

愛媛大学同窓会の先生方には、ますますのご指導・ご鞭撻を賜りますよう、どうぞよろしくお願い申し上げます。

退職教授からのメッセージ



大澤 春彦 (特別会員)

(愛媛大学大学院医学系研究科 糖尿病内科学 教授)

愛媛大学医学部での28年間を振り返って

2025年3月末の退任にあたり、ご挨拶申し上げます。私は、1984年に千葉大学医学部を卒業して同第二内科に入局しました。牧野前教授が主催する糖尿病グループのお世話になり、学位取得後に、1991年から米国バンダービルト大学医学部分子生理学・生物物理学のGranner教授の研究室に留学しました。最先端の分子生物学を用いた基礎研究に約6年間集中したことが大きな財産になりました。1997年4月に愛媛大学医学部臨床検査医学(現糖尿病内科学)に助教として赴任し、8月から助教授、2008年に分子遺伝制御内科学(現糖尿病内科学)教授に就任致しました。

赴任後、牧野前教授がミレニアムプロジェクトの班員になり、研究資金と共同研究者に恵まれました。糖尿病感受性遺伝子の同定と分子機構の解明を主たるテーマとして多くの論文を発表できました。特に、インスリン抵抗性を引き起こすサイトカインであるレジスチン遺伝子の発現が、転写調節領域のSNPにより制御され、血中レジスチンの上昇を介して2型糖尿病のリスクを高めることを見出しました。以降、ヒトにおける血中レジスチン制御機構をライフワークとし、共同研究者をはじめとする関係者の方々のご支援のおかげで、日本臨床検査医学会学術賞、日本体質医学賞を受賞できました。また、糖尿病学会の全国集会である糖尿病学の進歩を主催でき(愛媛では初、四国では16年ぶり)、大変光栄に思っております。

診療としては、医局員の努力により、年間750例以上の紹介入院患者の血糖管理(毎日40-50名)、中等度以上の手術患者年間約4500例中550例の血糖管理、病棟で測定した全血糖データのカルテ自動転送システム(リアルタイム)の構築等で病院に貢献できるようになりました。

教育としては、ほとんどの医局員が学位を取得し、糖尿病学会地方会、体質医学会、臨床化学会などのYIAを受賞し、教室運営に掲げたphysician scientistの育成が実りつつあります。

また、東温ゲノムスタディ(2500名を15年間追跡、RNAseq等)に使用できる質の高いサンプルと多岐にわたる臨床データが特徴を進め、基礎と臨床の融合研究促進基盤を構築しました。おかげさまで、赴任後、科研を2億円獲得することができ、現在も医局員全員が科研を取得しています。

地方大学の将来は一般的にはかなり厳しいと見られているようですが、その中であって独自に輝けるチャンスとも言えます。愛媛大学医学部が、皆で力を合わせて研究業績を上げ、大学院としても益々発展することを心より祈っております。これまでにご支援・ご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。



川本 龍一（特別会員）

（愛媛大学大学院医学系研究科 地域医療学 教授）

退官を迎えて～地域で医師を育てる～

2009年1月1日に地域医療学講座が新設され、同時に私は教授に就任し、今年度で定年退官を迎えます。これまで診療・教育・研究の各分野にわたり、様々な方からご指導いただき深く感謝申し上げます。

私は1985年に自治医科大学を卒業し、愛媛県立中央病院で初期研修を受けました。初任地は山間へき地にある町立野村病院（現：西予市立野村病院）で、地域医療の醍醐味を少しずつ感じ、後期研修を自治医科大学地域医療学講座で受けました。大学では最先端の医療や地域での研究手法を学びながら、学生や研修医の指導、日本各地の病院や診療所の支援にも参加しました。こうした活動を通して、地域で診療・教育・研究を行うことが将来の地域医療学の確立に必要であることを痛感しました。後期研修後、再び町立野村病院に戻り、義務年限が明けてからは愛媛大学医学部第三内科教室にもお世話になりました。そうした中、深刻化する医師不足と偏在対策として、愛媛県からの寄附講座という形で本講座が新設されました。実際の教育現場として西予市立野村病院と久万高原町立病院、その後、県立南宇和病院に地域サテライトセンターが設置されました。本講座の設立理念は「地域で医師を育てる」です。講座のスタッフが診療活動を行いつつ、現地スタッフや住民の協力を得て地域志向性のある医師を育てることを目指しました。スタッフ不足などの課題が山積する中での実施でしたが、学生たちは多職種連携活動を通じて地域医療を学び、卒業生も次第に地域に派遣され、各地で活躍されています。大学での座学では、地域枠学生に対する教育に力を入れてきました。毎週昼休みに実施している地域医療ワークショップや8月のサマーセミナーを通じて、地域医療への動機付けに努めてきました。大学附属病院では、総合診療科を担当し、外来診療を行ってきました。対象は地域の医療機関からの初診患者ですが、紹介患者や継続患者は少しずつ増えています。現在、当講座では地域住民のコホート研究や学生の地域志向性尺度開発の研究を継続しており、科研費や愛媛大学地域協働教育研究支援事業経費、人生100年時代づくり・地域創生ソフト事業交付金などから予算を獲得してきました。また、当講座には研究科配属の学生が所属しており、地域特有の調査を行い論文に仕上げることができました。

地域で求められる医師像は、幅広い臨床能力を備えることに加え、保健、福祉にも精通し医療を展開できることだと思います。ぜひ多くの医師にへき地にも目を向けていただき、少しでもへき地医療に参加する機会を持っていただきたいと思います。



松浦 文三（昭和59年卒・6期生）

（愛媛大学大学院医学系研究科 地域生活習慣病・内分泌学 教授）

退任にあたって

2025年3月末をもって、愛媛大学 大学院医学系研究科 教授を退任することとなりました。

愛媛県松山市出身の私は、1984年に愛媛大学6期生として愛媛大学を卒業後、第三内科に入局し、教育出張として済生会小田病院に3年余り、学位研究終了後に国立療養所愛媛病院（現愛媛医療センター）に3年余り、そして2000年に米国に1年間留学した以外は、33年間愛媛大学に在籍したことになります。現職の地域生活習慣病・内分泌学講座は、2010年から愛媛県内子町の寄附講座として担当しています。

研究面では、特に2000年の米国留学以後は、消化管ホルモンと生活習慣病に関して、基礎的臨床的研究を行い、モチリン・モチリン受容体結合機構、活性化機構の分子メカニズムを世界で最初に報告するとともに、ヒト消化管での発現様式、中枢との連関、グレリンやセロトニン、薬物、生活習慣病との相互作用について明らかにしてきました。

15年間の寄附講座では、内子町小田地区の診療支援にあたりるとともに、内子町の保健医療行政に協力し、内子町における高血圧症、糖尿病、慢性腎臓病の減少、医療費の減少に多少とも寄与できたと思います。

附属病院では、内分泌代謝・糖尿病領域の診療とともに、栄養部部長（兼任）、NST責任者、栄養療法外来責任者、肥満外科療法チーム責任者として、附属病院の栄養関連治療体制の確立・発展に注力するとともに、間脳・下垂体疾患センター長として、愛媛県下の間脳下垂体疾患診療の向上に寄与できたと思います。

以上を通じて、内分泌学会、甲状腺学会、糖尿病学会、肥満/肥満症治療学会、病態栄養学会で多くの専門医、指導医、学会評議員育成に携わりました。特に内分泌学会では12年間にわたり四国支部代表を務め、四国支部の活性化とともに市民公開講座の開催による市民啓発活動に注力しました。

私の医師人生を振り返り、今後の愛媛県、日本の医療を担う若い学生・医師へは、ぜひ留学を経験していただければと思います。基礎研究にしても臨床にしても、視野が広がります。英語が得意でなかった私は、最初ボスのということが理解できず、中国人の同僚に平易な英語に通訳してもらったことが懐かしく思い出されます。留学で知り合ったボスや同僚は一生の宝物で、帰国後もずっと連絡を取り合っています。

最後になりましたが、愛媛大学が今後益々発展することを願っています。



佐野 由文

(愛媛大学大学院医学系研究科 先進呼吸器外科学 教授)

3人から始まった夢の航海

2010年7月1日の朝、愛媛大学 心臓血管・呼吸器外科学の医局に足を踏み入れた時、河内寛治教授が迎えてくださり、「期待しているよ」と優しく声をかけてくださいました。その言葉に身の引き締まる思いを感じたことを今でも鮮明に覚えています。

私と共に赴任したのは、現岡山大学の岡崎幹生先生でありました。当時、医局に在籍していた呼吸器外科医は湯汲俊悟先生ただ1人で、彼は多くのことを教えてくださった後、わずか2か月で風のごとく異動されました。最初はたった3人での出発でしたが、すぐに2人となり、非常に心細い船出であったことを今でも思い出します。

愛媛大学に赴任するにあたり、私は「愛媛大学呼吸器外科を日本一にする」という大きな「夢」を掲げ、それを様々な場で公言してきました。その実現のために必要なものは「人」と「仕事」だと考えました。「人」とは、医局員（医師）やメディカルスタッフであり、外科医にとっての「仕事」とは「症例」「手術」です。以来、学生や研修医に対して私たちの魅力を広く伝え、メディカルスタッフの充実を図り、合同カンファレンスを設けました。また「症例」を増やすため、全国に先駆けて新しい手術法を導入し、世界トップクラスの技術と成績を維持することを目標に取り組んできました。

その甲斐あってか、2010年には2名であった医局員は、現在では在局9名、在外医局員5名にまで増え、呼吸器外科分野では全国でも有数の規模となりつつあります。また2010年には51例であった年間手術症例数も2021年には281例と大幅に増加しました。現在、病院手術施設や手術室スタッフの制約により症例数は減少していますが、患者の不利益を最小限に抑えるため、医局員が関連病院に出向いて手術を行うシステムを確立しました。

残念ながら、就任当初に掲げた「日本一」という目標を達成するには至らなかったかもしれませんが、その基盤を築くことができたのではないかと感じています。今後、私の「宝」である後輩たちが、私が果たせなかった「夢」を実現してくれると信じ、この十余年にわたる私のここでの「現」を終えたいと思います。

最後に、多くの皆様にご迷惑をおかけし、また多大なるご支援をいただいた大好きな愛媛大学に、心から感謝の意を表したいと思います。長い間、本当にありがとうございました。今後愛媛大学がさらに大きく発展されるよう心より祈念いたしております。



東山 繁樹

(愛媛大学大学院医学系研究科 生化学・分子遺伝学 教授)

退職にあたり

松山は日本でも有数の観光地です。豊かな海、山、そこで取れる幸、文化の香りする街、癒される温泉、温かい人々、こんな良い街にある愛媛大学の学生たちは、本当に良い時間を過ごせ、幸せだなとつくづく思います。

私が着任した第二医学講座は教授含め4名の常勤スタッフが居る教室でした。新たなメンバーとして誰も採用できない中での教室運営スタートでした。新規にメンバーを採用できたのは着任後10年してからのことです。また、実験室の電圧が足りず、搬入機器を同時に稼働させることができませんでした。配電盤の増設を医学部事務にお願いした所、自前でやるようにとの返事でした。教室には古びたスチール机と椅子があっただけで、全てを自前で揃えなければなりません。今振り返ると、よくやってこれたものだと感じます。教室の整備や配電盤設置に関して言えば、これは大学施設の担当です。当然大学が受け持つべきものですが、予算が無いとのことで軽く片付けられました。さすがこの時は、「退職時に、配電盤を剥がして持っていったっていいですか」と尋ね、事務からは「どうぞ」との返事でした。今はその配電盤は、耐震工事で新しい物に置き換えられ残ってはいませんが、懐かしい思い出の一コマになっております。

このような状況の中、助け船を出してくれたのはいくつかの臨床教室でした。まさしく「捨てる神あれば、拾う神」あります。何名もの大学院生を送ってくださり研究推進の力添えをしてくださいました。感謝です。その後、大型研究予算の獲得に努め、プロテオ医学研究センターの設立、プロテオ医学研究センターと無細胞生命科学工学研究センターとの融合によるプロテオサイエンスセンターの設立を先導し、今に至っております。また20名を超える大学院生の学位取得を後押ししました。自分の経験を踏まえ、次の世代にスムーズなバトンタッチを考え、最後の仕事である教室員の人事に全力を尽くしております。

どこの大学でも、新任教授着任時に教室員人事がスムーズに行くことは極めて稀です。新任教授の船出に、既存の教室員が重荷になることなく教室運営をスタートさせるには、どうすれば良いか。教室スタッフ全員が心すべきことがあります。皆様よくご存知の1961年、ジョン・F. ケネディ米国大統領の就任演説の時の国民に対する呼びかけの言葉です。

“Ask not what your country can do for you. Ask what you can do for your country.”

この言葉で、“your country”を“your university”に置き換えてください。

愛媛大学医学部発展のために、是非、教員と事務全ての常勤スタッフが心に留め、行動すべき言葉です。愛媛大学医学部を、この素晴らしい街、私の大好きな街、松山にふさわしい大学医学部に発展させていってください。皆様の益々のご活躍と愛媛大学医学部の発展を、心より祈念しております。

恩師をおたずねします



「愛媛大学医学部同窓会誌に寄せて」

植田 規史 (特別会員)

(愛媛大学医学部名誉教授
＜前分子病理学教授 現西条医療福祉センター 顧問＞)

私の愛媛大学医学部との関わりは、アメリカでの留学後に当時病理学第一講座の福西亮教授からの勧誘で、助教授として赴任したのが始まりです。平成3年に同講座教授となり、平成9年からは医学部長も務めさせて頂きました。病理学の講義は人体全臓器・全器官の多岐にわたる病変に対する解説のため、講義内容は豊富になり、ともすれば難しくすぎてしまうくらいがあります。当時私は未熟で、簡単にわかりやすく説明すべきことを、ことさら難しく説明してしまうような癖がぬけず、今になって振り返ってみると、医学生の方々に對し、より上手に且つ各病変の理解を深める講義をすべきなのですが、思い返しても、とても自慢ができるようなよい講義をしたとはいえません。それが、今でも悔やまれて反省しきりです。今更ですが、卒業生諸君には申し訳ないことをしたと思います。その出来の悪いはずの講義を受けた諸君が、愛媛大学医学部同窓会を構成し、その時代のニーズに合った医学研究・診療を行う数多くの高度の実力を持つ優秀な医師・医学者を輩出して、国際的視野に立って医学の発展や国際交流にも貢献し、多くの研究所、病院で働く教育・研究者や医師指導者として活躍して、我が国の医学部の中でもトップクラスに入る業績を挙げておられることを聴くにつけ、皆さんそれぞれが素晴らしい学生諸君であったと感じ入っています。勿論、地域を支える優秀な開業医としても活躍している卒業生もおられ、永年にわたり国民の疾病の治療や健康増進に大きな役割を果し、名実ともに医療・教育・研究の中心機能を担ってきたことに対し、卒業生の皆様方の熱意とご努力の賜物と深く敬意を表したいと思います。近年の医学の高度化・専門化はめざましいものがあり、医師養成における愛媛大学医学系研究科の今後の取り組みには、大きな期待が寄せられていると思います。疾病の診断、予防、治療においてさらなる国際的貢献に寄与し、愛媛大学医学部同窓会がますます発展されることを祈念し、同窓会各位のご健勝をお祈り申し上げます。

愛媛大学医学部同窓会会則

第1章 総 則

第1条 本会は、愛媛大学医学部同窓会と称する。

第2条 本会は、東温市志津川 454、愛媛大学医学部内に置く。

第2章 目 的

第3条 本会は、母校の創立精神を尊重し、会員相互の親睦を密にし、学術の向上を図り、母校の発展に積極的に寄与することをもってその目的とする。

第3章 事 業

第4条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 会員名簿、及び会報の発行
- (2) その他、本会の目的達成に必要な事項

第4章 同窓会会員

第5条 本会の会員を次の通りとする。

- (1) 正会員
愛媛大学医学部医学科を卒業し、かつ会費完納の者
- (2) 学生会員
愛媛大学医学部医学科に在学中の者
- (3) 特別会員
愛媛大学医学部教員、及び元教員のうち入会を希望する者。但し、正会員を除く。
- (4) 準会員
愛媛大学大学院医学系研究科を修了した者のうち入会を希望する者。但し、正会員を除く。
- (5) 賛助会員
愛媛大学医学部、及び愛媛大学大学院医学系研究科に縁故のある者で、役員会の承認による。

第5章 同窓会役員

第6条 愛媛大学医学部同窓会に次の役員（計16名）を置く。

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 会 長 | 1名（任期は3年、2期6年を超えない。） |
| 副 会 長 | 2名（会長が指名し、役員会の半数以上の賛成をもって承認する。） |
| 常任幹事 | 3名 |
| 幹 事 | 8名 |
| 監 査 | 2名 |

第7条 本会の役員は、総会において正会員のうちからこれを選任する。

第8条 役員は、それぞれ次の職務を行う。

- (1) 会長は、本会を代表し、いっさいの会務を統括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故のあるときはその職務を代行する。
- (3) 常任幹事は、常時それぞれの担当会務を処理する。
- (4) 幹事は、会務に参画する。
- (5) 監査は、会務・資産及び会計の監査に当たる。

第9条 会長以外の役員の任期は1年（4月1日～3月31日）とし再任を妨げない。ただし満70歳定年制を定める（細則に記載）。

2. 補欠により選任された役員の任期は前任者の残任期間とする。
3. 役員は、任期終了においても後任が決定するまでは任務を行うものとする。

第6章 会 議

第10条 本会の会議は、会員総会、役員会（計16名）、及び常任幹事会（会長、副会長、常任幹事、計6名）の3種とする。

第11条 総会は、本会の最高決議機関であって会員をもって組織する。

2. 総会は、通常総会及び臨時総会の2種とし、役員会の決定に基づき会長がこれを召集する。
3. 通常総会は、年1回（8月第一週土曜日に）開催し、臨時総会は必要に応じて開催する。
4. 総会の議長は、出席正会員の互選によりその都度選出する。
5. 総会の議事は、出席会員の過半数の同意によりこれを決定し、可否同数の場合は議長がこれを決定する。
6. 次の事項は、総会の議決又は承認を得なければならない。
 - (1) 役員の選任
 - (2) 事業報告、及び当該年度の事業計画に関する事項
 - (3) 予算、決算に関する事項
 - (4) 会則及び施行細則の変更
 - (5) その他、役員会が必要と認めた事項

第12条 役員会及び常任幹事会は、本会の業務を企画、運営し前条に定めた総会の議決を要する事項を除く一切の事項を議決する。

2. 役員会は第5章第6条の役員（計16名）をもって組織し、常任幹事会は幹事ならびに幹事・監査を除く役員（会長、副会長、常任幹事、計6名）をもって組織する。

- 役員会及び常任幹事会は、会長がこれを召集する。
- 役員会及び常任幹事会の議長は、会長がこれにあたり、会議を主宰する。
- 役員会は、役員の過半数の出席をもって成立し、議決は出席役員の過半数の同意を要する。可否同数の場合は、議長(会長)がこれを決定する。
- 役員会は、次の事項を通常総会において報告しなければならない。
 - 事業報告、及び当該年度の事業計画に関する事項
 - 予算、及び決算に関する事項

第7章 会 計

- 第13条** 本会の資産は、次の各号をもって構成し、役員会がこれを管理する。
- (1) 会費
 - (2) 寄付金
 - (3) その他の収入

- 第14条** 本会の会計年度は、毎年4月1日より翌年3月31日までとする。

第8章 支 部

- 第15条** 本会は、役員会の承認を得て必要な地域に支部を置くことができる。支部には代表者を置く。支部代表は会長選挙において一票を有す。

第9章 雑 則

- 第16条** この会則についての施行細則は、別にこれを定める。

附 則

この会則は、1982年4月1日より施行する。

設立年月日 昭和57年4月1日

2. 1982年12月20日、通常総会において改正
3. 1986年3月29日、通常総会において改正
4. 1991年3月30日、通常総会において改正
5. 1999年5月14日、通常総会において改正
6. 2017年5月19日、通常総会において改正
7. 2018年5月18日、通常総会において改正
8. 2019年8月3日、通常総会において改正
9. 2020年8月1日、通常総会において改正
10. 2024年8月3日、通常総会において改正

愛媛大学医学部同窓会会則施行細則

(目 的)

- 第1条** この細則は、愛媛大学医学部同窓会会則に基づき、本会の運営についての細則を定める。

(会 費)

- 第2条** 会員は、下記の通り会費を納めるべきものとする。
2. 正会員及び学生会員の会費(入会金を含む終身会費)は5万円と定める。
 3. 特別会員、準会員及び賛助会員の会費(入会金を含む終身会費)は2万円とする。
 4. 会費納入方法は別途定める。

(同窓会役員)

- 第3条** 会長は広く本同窓会の正会員(終身会員)から公募あるいは推薦し、役員会(現会長1、副会長2、常任幹事3、監査2、幹事8)ならびに*同窓会地区代表幹事5で投票を行い、過半数を超えない場合は、上位2名による決戦投票の後、過半数を持って選出される。同票の場合は現会長が指名する。会長の任期は3年とし、役員会ならびに同窓会地区代表幹事(半数以上)の承認がある場合にのみ2期6年まで勤めることができる。副会長2名は会長が指名し、役員会の半数以上の賛成をもって承認する。会長を含む全ての役員は満70歳になった時点で定年とし、会長ならびに副会長以外の役員が退会する場合、本人が後任を推薦し、役員会の半数以上で承認する(仮に否決された場合は再度推薦する)。
- *同窓会地区代表幹事とは、九州支部、中国支部、近畿支部、東日本支部、東海支部を指す。今後、全国の支部が幹事会の承認の元に増加した場合は、定員5を増加する。

- 第4条** 会則第6条に定める役員のうち、副会長、監査、常任幹事の半数以上は学内の会員よりの選出とする。

(役員会ならびに同窓会総会)

- 第5条** 会の運営を行う常任幹事会(会長1、副会長2、常任幹事3)は必要時に不定期開催とし、役員会(会長1、副会長2、常任幹事3、監査2、幹事8)は4月ならびに、8月第一週の土曜日(同日同窓会総会を開催)に開催する。常任幹事会ならびに幹事会の決定事項は同窓会総会の承認(過半数)が必要であり、否決された場合は継続審議とする。会議には、会議録を作成し、出席会員2名の署名を要するものとする。

(会議の運営)

- 第6条** 本会の会務運営のため、次の各部会を置く。

- (1) 庶務部
- (2) 企画部
- (3) 広報部
- (4) 渉外部
2. 各部に部長1名を置き、副会長又は常任幹事のうちから選出する。
3. 各部の管掌する業務は別にこれを定める。

(事務職員)

- 第7条** 本会に事務職員を若干名置く。

附 則

この会員施行細則は2024年8月3日から施行する。

この細則に定めていない規定は、役員会においてこれを定める。

愛媛大学医学部同窓会 申し合わせ事項

会費納入における申し合わせ

同窓会正会員費は終身会費5万円と定める。

会費は愛媛大学医学部入学時に一括5万円の納入を原則とするが、諸事情で卒業時までに全額納入する事も容認する。また、退学時要望があれば納入金を返却する。

2018年5月時点の卒業生で終身会員の手続きが未施行(全額納入していない)のものについては、2019年8月1日までの移行期間と定め、この期間に納入を終えない場合、同窓会正会員と原則認めない。

名簿等に関する申し合わせ

1. 在校生にも会報・名簿を配布する。ただし、会費未納の場合は、会報のみ配布する。また名簿にも在校生を記載する。
2. 名簿に掲載する住所は連絡先とし、自宅・勤務先・その他の連絡先かの選択は会員本人の任意とする。また、電話番号・電子メールアドレスに関しても掲載・非掲載は本人の意思によることとする。
3. 2019年8月以後終身会費を納入していない会員*には名簿を配布しない。
* ここでいう「会費を納入していない会員」とは、終身会費を納めていない愛媛大学医学部卒業生を言う。
4. 終身会費未納入者の卒業生には名簿を配布しないことを明記する。
5. 名簿の配布は終身会員に限り、要望があっても終身会員以外には原則配布しない。
6. 卒業生から要望があった場合、次の場合に限り送付する。
 - (1) 会費を納めていなかった卒業生が終身会員として会費を納めた場合
 - (2) 住所不明のため名簿が配布出来なかった終身会員である場合注：紛失した場合、複数部要望した場合は原則送付しない。

同期会についての申し合わせ

愛媛大学医学部医学科卒業生が同期会を開催するにあたり、次の条件が全て満たされれば愛媛大学医学部同窓会は5万円の援助を行う。

1. 正会員20人以上集まること。

2. 会の写真と報告文を(集会終了後4週間以内に)同窓会に提出すること(会報原稿用)。
3. 開催予定日を事前に同窓会事務局に連絡の上、(集会参加者で)会費未払いの人へ納入のお願いを行うこと。
4. 2年に1回とする。
5. 卒後20年まで(20年を含む)とする。

支部に関する申し合わせ

1. 支部立ち上げ時に限り1支部あたり10万円の援助を行う。
注：今後、多くの支部が隣接に設立される可能性があるので隣接支部間で十分な協議を行いそのエリアを明確にする必要がある。
支部が支部総会を開催するにあたり、次の条件が全て満たされれば、愛媛大学医学部同窓会は、10万円の援助を行う。
 1. 援助金の用途は、開催費用(飲食以外の会場費・講演料・講師旅費)とすること。
 2. 総会で会計報告を行うこと。
 3. 開催予定日を事前に同窓会事務局に連絡の上、(集会参加者で)会費未払いの人へ納入のお願いを行うこと。
 4. 1年に1回とする。

講演者旅費に関する申し合わせ

1. 愛媛大学医学部同窓会会員が、同窓会の交流・連絡等の目的で出張する際には、バック料金(往復の旅費とシングル宿泊料金)を同窓会が負担し、何らかの理由でバック料金が使用出来ない場合には、往復旅費と一泊15,000円以内のシングル宿泊料金を同窓会が負担する。また、この金額を超える場合、追加料金分は会員自身の負担とする。ただし、特別会員の恩師を招待する場合はこの限りでは無く、この費用については、同窓会長が判断し、役員会で事後に承諾を得ることを原則とする。

この申し合わせ事項は2024年8月3日から施行する。

第40回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました

2024年8月3日16時より、松山市・リジェール松山ゴールドホールにて、第40回愛媛大学医学部同窓会総会を開催しました。

- # 1. 2023年度(同窓会活動)会計決算
ならびに2024年度予算案の承認
(審議事項)
- # 2. 2023年度同窓会の活動報告(報告事項)
- # 3. 医学部創立50周年記念事業(報告事項)
- # 4. 2024年度同窓会の活動(審議事項)
- # 5. 各支部への支援について
(報告・審議事項)
- # 6. 新同窓会会長の選出・承認
- # 7. その他(報告・審議事項)

に引き続き、特別講演(下記# 1、# 2)を開催。

座長 植田 規史先生(特別会員)
愛媛大学医学部名誉教授(前 分子病理学講座 教授 現 西条医療福祉センター 顧問)

- # 1. 長阪 一憲先生(愛媛大学医学部22期生)
帝京大学 医学部 産婦人科学講座 教授
演題 「東京 0.99 ― 婦人科良性疾患から癌、そして周産期医療への課題 ―」
- # 2. 小山 忠明先生(愛媛大学医学部13期生)
関西医科大学 医学部 心臓血管外科学講座 教授
演題 「心臓手術の低侵襲化～学生時代からこれまでに振り返りながら～」



毎年8月第1土曜日、同窓会総会を開催します。2025年8月2日(土曜日)もどうか皆様ご参加下さい。各学年(期)同窓会との同日開催もお考え下さい。

50周年を終えて、7期生雄志座談会



鍋加 今年から、医学部同窓会の同窓会長にご指名いただいた鍋加です。宜しくお願いいたします。それでは、今年も恒例の7期生雄志の座談会を始めます。昨年までの流れと同様にしたいと思いますので、まず簡単に自己紹介をお願いします。

山本 松山市・済生会松山病院の山本昌也(やまもとまさや)です。僕は、柳瀬先生とはずっと一緒にやらせていただいて来ましたが、なかなか7期生の方との知り合いが少なく、5期生、6期生とむしろ親しいという感じでした。



愛媛大学医学部同窓会
会長 鍋加 浩明

卒業後1年目は大学の放射線科(当時の放射線医学・濱本研教授)に入局し、2年目からは三崎町の診療所に行っていました。その後、がんセンターに行き、昭和63年7月から済生会松山病院に着任して以来、ずっとそこにいます。なぜか放射線科のドクターは済生会へ出づっぱりが多く、僕も36年になりますが、今治病院の真鍋先生(3期生)、西条病院の大谷先生(5期生)はどちらも僕より長く、40年を超えて一人前という感じです。僕もそれに倣い63年以降、済生会一筋です。



済生会松山病院 放射線科 部長
にぎたつ苑 苑長 山本 昌也

当時はドクターの数が少なかったということもあり、放射線科と兼任で内科の外来と内科の入院患者も診ていました。旧病院時代で91床でしたがその時で8人、その後141床になって12人と圧倒的に少なかったんです。今では研修医の先生も含めると53人ですから、隔世の感があります。当時は、とにかく外来も入院患者も持たないと話にならなかったんです。当時は、午前中は外来をこなし、午後はアンギオ(血管造影検査・治療)を行い、夕方から回診をして、夜には画像診断や所見付けを行っていたので、20時に帰れたら上出来という状況でした。当直も多かったですし、我々の多くが、今問題となっている超過勤務200時間をこなしてようやく一人前という生活が続いていました。そうしているうちに放射線科の下世代の先生も来てくれるようになって、だんだんと楽になっていきました。

54歳のとき、病院に併設された老人保健施設「にぎたつ苑」の施設長として着任し、今に至ります。老健というのは昔に比べると仕事も楽になりましたが、改正のたびに仕事が増えていて、ドクターがしなければならないことが増えていっています。40～50代のドクター向けの話を頼まれるなど、年齢的にも古希が近づき、交代を考えながらの現状です。

鍋加 ありがとうございます。続いて立石先生、お願いします。

立石 立石憲彦(たていし のりひこ)です。入学して自慢だったというか、有名だったことは学年で3月生まれで一番若かったことです。



真網代くじらリハビリテーション病院
アドバイザー 立石 憲彦

卒業時点では臨床に行こうかどうしようかと思っていたのですが、生理学にすごく興味があつたので、一年間だけ第二内科(当時の内科学第二・國府達郎教授)で臨床をさせてもらってから生理学に入りました。それから一切病院では常勤をせず、生理学(当時の生理学第二・志賀健教授)で助手をしながら教育に携わりました。医療情報部に2000年から入って、2006年に助教授になりました。教育にずっと携わっていたので、過去に愛媛大学を卒業した医師の中には何人か僕の名前を知ってくれている人もいます。

2006年からは、たまたまですが長崎に行き、大学教授にはなったのですが、臨床というより看護学科しかないような病院で看護教育に携わり、臨床としての医療ではなく、教育をはじめ、地域保健医療対策協議会や地域医療構想調整会議のメンバーとして、地域医療へも尽力していました。

2006年までは愛媛大学医学部同窓会のスタッフもしていましたが、長崎に行くにあたっては辞めてしまいました。それでも、年に1回、九州の愛媛大学同窓会があつて毎年参加しています。今年の3月31日で大学を退職したことから、4月から愛媛に戻ってきました。今は、卒業後から長崎にいた間にも当直をお手伝いしていた、八幡浜市の真網代くじらリハビリテーション病院で6月から常勤医をしています。

鍋加 ありがとうございます。続きまして…

樋田 樋田一徳(といだかずのり)です。ちょうど45年前に愛知県から松山に初めて来ました。大学を出てすぐ大学院に入り、第二解剖学の上原先生(当時の解剖学第二・上原康生教授)にお酒が好きだからと誘惑されました。上原先生が熊本大学に異動された時には、学位を取ったうえで追いかけて2年間いました。途中、宇宙飛行士に応募したこともあります。その後、上原先生の弟弟子の先生から九州大学に来ないかと誘いがあり、そこから九州大学に6年半いました。その後、縁があつて徳島大学で9年半いて、助教授としていろんな方との出会いがありました。

2008年に現在も勤務している川崎医科大学に来了。そこで早17年目です。ずっと解剖学を教えていますので、毎年若々しい顔つきの学生たちを見るんです。こちらは1年1年歳を重ねるのですが、何千人もの解剖を教えて来て、しかも川崎医科大学ではマクロもミクロも分かれていないので、全部教える必要があるんですね。たくさんのスタッフと



川崎医科大学 解剖学
教授 樋田 一徳

共に充実した仕事をしています。研究は電子顕微鏡を使って神経回路を観察して、脳が匂いをどう感覚するかということを専門にしているのですが、コロナの嗅覚障害でこれまでのことが裏付けられ、コツコツとやってきた研究が実を結んだんですね。体力だけは自信があって、30代の頃は20時間でもずっと電子顕微鏡を見て、そういう生活を10日でも2週間でも続けていられました。今でも、自分より多く電子顕微鏡写真を撮った人はいないだろうと思うのですが、そうすると国家プロジェクトで作った電子顕微鏡の使い手がいなくて月に1回、大阪大学にも行って研究しています。

本当に愛媛大学にはしっかりと育ててもらって、先程、自分たちの代の卒業アルバムを見せてもらったのですが、どの先生のこともちゃんと覚えていて、どの先生にどんなことでどう怒られたのかまで鮮明に思い出すことが出来ました。非常に充実した学生生活でした。

鍋加) ありがとうございます。続きまして…



松山まどな病院 健診センター
部長 柳瀬 尚人

柳瀬) 柳瀬尚人(やなせひさと)です。あまり頭の中が整理できていないので、思いついたことから話したいと思います。出身は愛媛県西条市で、3浪して入りました。

入局をどこにするか考えた時、当時の自分の理想として「何でも診ることのできる医師になりたい」ということがあったので、タイプの的には内科向きだと思ったのですが、外科的なことも学びたいと第一外科に入局しました。入ってみると外科は「体力勝負で頭はいらん」と指導医の先生の雑用・下働きという感じでした。2年目に運よく県病院に行き、1年間研鑽を積みました。

そこから、とりあえず学位はあるだろうということで、大学院に入るべきか研究生か迷いました。恒川先生(当時の外科学第一・恒川謙吾教授)が退任まで3年で、大学院に入ると間に合わないと思って研究生になりました。それが貧乏くじというか、誰もやりたがらない「交感神経のニューログラム」という研究テーマを引き継いだのですが、指導してくれる先生がいなくて、四苦八苦したものの自分1人では出来なくて、第一生理の助手のポストがあるよとの話をいただいて移り、「虚血性神経細胞死のメカニズム」基礎研究をさせていただきました。

教室のための研究だったので、一生懸命リサーチをして、最前線のことをやれたという自負はありましたが、つらいことに結局学位は取れませんでした。お世話になった片岡先生(当時の生理学第一・片岡喜由教授)を送り出した後、基礎研究を続けるか臨床に戻るか迷いましたが、元の第一外科の教室に戻りました。1年間は先生方の下働きのようなことをして、その後松山市内の小さな病院に行ったのですが、思うように症例を積むことは出来ませんでした。そこに8年いたのですが、そこが救急病院を辞めたので外科医の必要がなくなったんです。代わりに、当時始まったばかりの訪問診療を担当したので、松山市をあちこち回る経験をしました。

院長が代わるタイミングで今度は今治の病院に行ったのですが、今治圏域で日曜日の救急病院はそこ一つしかなく、新型インフルエンザの流行で山ほど小児患者が来たんです。かなり大変でした。毎週日曜日がそうになってしまうと耐えられなくなってしまい、松山の病院に1年で戻りました。NTT西日本病院で検診のポストが空いていたので、体力もなくなってきていたもあり、予防医療の方に従事するようになりました。そして3年前に名前が変わって、今の松山まどな病院になり、理事長が同門の先生で「居られるだけ居たらいい」ということでマイペースで仕事をさせてもらっています。臨床を離れたというブランクもありながら、まだまだいけるかなと頑張っています。健診はMRIなど読影が多いのですが、楽しんでます。

武田) 武田康成(たけだやすなり)と言います。松山で幼稚園からずっと育ち、1年浪人して愛大医学部に入った、生粋の松山市民、愛媛県民です。大学で6年過ごした後、私の場合、父親が産婦人科医だったということで、迷わず愛媛大学の産婦人科(産婦人科学・松浦俊平教授)に入局しました。2年の研修を経て、大学院に進んだとき、体外受精が始まって増えていくような時期で、研究をしたらすぐに論文になるタイミングだったのでそれに乗り、不妊症の研究をして学位を取得しました。

その後、大学で勉強をしながら、あいだの1年ほどを町立野村病院で過ごし、40歳の時に父がやっていた病院の後を継いで、城北地域で開業医となりました。分娩も多く経験したものの、昨年64歳を迎え、全国的にも分娩数が減っていることから、分娩の取り扱いを辞め外来診療のみとなりました。ただ、仕事としては保険の審査員や中学校の学校医もしています。また、小さな産婦人科ですので、様々な患者さんが来ます。男性も絡むトラブルですと警察官ともやり取りしなければなりません。松山でも外国の方の居住が増えていますので、そうした患者さんも増えて来ました。今後も業務を少しずつ縮小しながら、頑張っていきたいと思っています。



武田産婦人科医院
院長 武田 康成

鍋加) 一通りの自己紹介が終わったところで、自由にお話をしていただこうと思います。入学当時、愛媛県や松山、愛媛大学の印象はいかがでしたか？

樋田) 愛知県から来たのですが、浪人生もいましたから結構年上の人もいて凄いな、と思ったのが事実です。また、全国から人が集まっているので、関東から関西、九州までいろんな所から来た人がいたのも楽しくて、いいところに来たと思いました。2年間の松山生活も楽しかったのですが、重信(東温市)へ来てからはとても寒かったという思い出があります。今はすっかり住宅地になっていますが、当時は田んぼしかなくてよく自動車が落ちているのを見かけました。

柳瀬) 私も。浪人して東京の予備校に通ってから入学したので、最初の教養課程に行った時には、見知った顔がたくさんあって驚きました。まるで予備校の延長のようで楽しく過ごすことが出来ましたね。

樋田) それと、ちょうど1期生が卒業して医師として研修を始める頃だったので、6年であんな姿になるのだろうかと思っていました。振り返ってみると6年はあっという間でしたし、ほとんど部活をしていてあとは遊んでばかりでした。若干皆さんより遅れて卒業したのですが、しばらくは「ちゃんと医師になったのか…」と心配していただくことが多かったですね。同級生だけでなく、先輩後輩にもご迷惑やご心配をおかけしました。改めて、この場を借りてお詫び申し上げます。

鍋加) 大学時代はいかがでしたか？

立石) 同級生の中で一番年下だったのですが、自治会の委員長をしたりしていました。また、医学部に生協を入れたり、コンピューターサークルを立ち上げたり、学習よりは他のことばかりやっていました。

樋田 同じく7期生の柘植君(柘植勇人君)は中学からの同級生で、唯一の知り合いでした。彼は落語をやっていた落研だったのですが、私は柔道部でした。松山城の堀端の道を県警機動隊の柔道をしている人と一緒によく走っていたことを覚えています。

柳瀬 専門移行してから、朝が苦手であり授業に出ていなかったのですが、試験の時にとにかく苦勞しました。3年生の時には本試験の時に一発で受かることの方が珍しかったですね。授業ノートのコピーを入手するのですが、本試験では何処が大事かを見分けて、追試験でいい点数を取って単位を取るという感じでした。しかし、それによくないと4年生からはほぼ一発で受かるようになりました。きっかけになったのは組織学の実習で、最初はスケッチに一生懸命になって中をちゃんと見れてなかったんです。勉強をちゃんとするとプレパラートを見ただけで肉眼で診断が分かるようになるので、以降はちゃんと勉強するようになりました。ポリクリが始まった時は山本先生と同じ班で、国家試験の時には先生のマンションで一緒に勉強もしました。

鍋加 せっかくの同窓会という機会ですので、先輩後輩を含めた同窓生との繋がりもお聞かせいただきたいです。

柳瀬 共通一次試験が導入された最初の年に入りました。そのせいで「この年の学生は…」としきりに先輩方と比べられることが多かったことを覚えています。出来が悪いといろんな科で言われました。

立石 それまで、愛媛大学医学部は当時新設で、東大などをを目指す浪人生たちが秋の試験で受かって入ってくるということもあって、とても偏差値が高かったんです。それがずっと続いていたので、僕らの前までは優秀な人ばかりが入ってきていたので、僕らが入った時に成績が悪い人が増えて厳しくなったという感じがありました。同窓会でも全国から来ていたので愛媛にいない先生方というのが多くいる印象でしたし、優秀な先生ほど県外に行かれている感じです。

武田 5期生、6期生は二期校で20倍の倍率と言われていましたよね。

立石 だから愛媛大学医学部なんて入れないと、高校の時には思っていました。

山本 僕が覚えているのは、合格発表のときに最初のほうの数字が75番しか受かってなくて、100人のうち一人しか通ってないのか、と思った記憶があります。多分たまたま1～100番台の人が少なかったとかだと思うのですが、これは落ちたと思いましたね。僕らの時でさえ、倍率が13～14倍だと言われてました。

樋田 秋入学なんて50倍とも60倍とも言われていましたよね。福西先生(当時の病理学第一・福西亮教授)だったか、「東の医科歯科、西の愛媛」っていうくらいツートップだったって言ってました。

武田 合格者が120人だったと思うんですけど、本当は80人でよかったのに40人も余分に取ってしまったとか、そういうことを言っていましたね。僕らの学年から100人から120人になったんですよね。3倍だったら足切りしたんですけど、とか、そういうことも言われましたし、2年生から3年生に上がる時留年して…多分40人も3年に上がれなかったとか。

樋田 2年生も結構落ちたし、さらに3年生も落ちて…だんだん少なくなって。そういう時期が7期生、8・9・10期生と暫く続きましたね。来年、また聞いてみて下さい。

立石 医学部に移ったら移ったで、講義室が最大100名までしか入れないということがありましたよね。最終的には後ろにもテーブルを並べて120人全員座れるようにはなりましたが。本当に、医学部の入学者を増やしようということと、共通一次試験(センター試験)が始まったというタイミングが重なったんですね。

樋田 詳しくは知らないんですけど、当時は人口10万人に対して150人の医学生というのが国の目標で、当時は138人くらいしかなくて、100人から120人に増やしたんですけど、一時減らしたりもして今はまた少し増やしていますが、医学部は100人というイメージが共通一次で急に崩れましたね。

柳瀬 それと、国家試験の合格率も僕らは悪かったというか、あまり良くなかったですよね。

樋田 私はずっと大学院にいたんですが、女子学生が昔はものすごく少なくて、私達の頃でようやく10%でした。今は30～40%くらいが女子学生で、大体に3人に1人が女性なんですが、昔の話を今の学生とすると今よりも圧倒的に男性社会だったわけですね。女性の方たちは皆さん優秀で、なかなか話も出来ないくらいでしたね。

山本 私の娘が、何期生か忘れましたが30何期生くらいなんですね。その年は女性の方が多かったと言っていました。

鍋加 僕で26期生なんですが、39人の女性がいて、凄くちやほやされていましたね。

立石 臨床医は女性が多すぎない方がいい、という雰囲気はありましたよね。産婦人科などでも女性医師が来ることが多いけれど、なかなか当直にも入れないしということで、女性が多いと男性医師に負担が偏って大変だ、みたいな話もあったんじゃないですか？

武田 最初はやっぱりありましたね。今ではそんなこともなくなって、産婦人科医の女性の割合は半分位だと思います。男性も女性も変わらず頑張っていらっしゃる方ばかりですね。

柳瀬 確かに、何とか産婦人科の女性の先生って強さがありますよね。言うべきことをびしっと言いますし。



樋田 仕事でアメリカやイギリスに行きますが、男女比率だと同等か、女性の方が多いくらいですね。やはり、看護師さんは女性が多いので、医療全体が女性のようなイメージを抱きましたね。日本も将来的にはそうなるのかも、と考えたりもしました。

大学でも女性が増えているということで、環境も変えていかないとはいけないし、言葉遣い一つとっても変えていく必要があるでしょうね。そのあたりが自分が医学生だった頃と、今との一番大きな違いかもしれません。

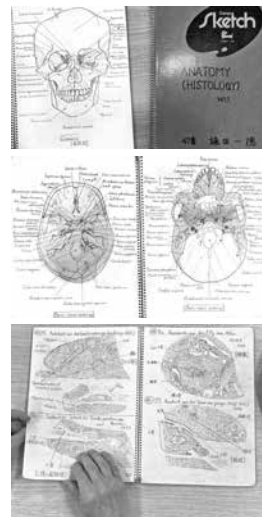
立石 僕らの頃は本当に、女性の同級生が少なかったですからね。

山本 それと、愛媛に残る人も少なかったんですよ。全国から受験しているということもあって、県外に出ていく人が多く、周りで働いている人に同じ年代の愛媛大学出身が殆どいないんです。僕が入局した時は僕を入れて3人の同級生がいましたが、1人は県外に行ってしまいましたが、愛媛に残っているもう1人とは未だに付き合いがあります。何でも相談出来るので同級生は本当に有難いんですが、とにかく少ないんです。その分、いろんな所に行つて同じ愛媛大学出身者を見つけると、先輩でも後輩でもとにかく仲間意識がすぐに生まれて、親しみを感ずります。

立石 今は、愛媛県のドクターは愛媛大学出身者が多くなりましたが、昔は愛媛県でドクターというと、岡山出身か徳島出身か…という話をしていたんですよ。今では愛媛大学出身者が愛媛県でドクターをして、愛媛の医療に貢献している、という風になって来ましたよね。

山本 うちの病院も僕が着任した時は愛媛大学出身は2人しかいなかったんですよ。あとは全員岡山大学の出身でした。今は他大学出身の方が少なく、殆どが愛媛大学出身者の先生になりました。それは今治病院や西条病院も同じ状況だと思います。

樋田 僕は大学院までは愛媛大学でしたけど、その後はずっと母校を離れていました。それでも、行った先の殆どに同窓生がいませんでした。大学で教わったことってちゃんと通用するの不安に思うこともあるんですが、今考えると本当にいい先生方に教えてもらったなと思います。今日、大学時代のノートを持って来ていて、先程見返していたんですが、今自分にはこんな授業は出来ないの、素晴らしい教育環境だったんだと思いました。板書の写しとか、スケッチとか、探してきたんですが、今でも医学生は同じことをしているんですね。バーチャルではなく、自分で観察してスケッチするんですけど、ノートを見返していると組織の名前とか全部ラテン語が書かれているんですね。



柳瀬 懐かしいですね。

樋田 仕事柄、ずっと残っていて、今日は話題になると思って持ってきました。こちらの病理学のノートは暫く行方不明だったんですが、30年程前に講演会をしたら後輩が「お借りしました」って持って来たんですよ。分子生物学とか、生化学とか必死で板書を写しましたね。これだけの教育を受けさせてもらったから、私は愛媛の外に出ても胸を張って仕事をすることが出来ました。

今日は持って来てないんですが、我々は直接知らない初代学部長の須田先生(須田正己教授)という方がいて、7期生が入学してすぐにご病気で先生が倒れてしまったんですよ。学園祭の実行委員をしていて、10周年の学園祭をやる年に須田先生からお手紙をいただいていたのですが、須田先生が退官の時に作った冊子があって、「医学部を作る時に若い先生を集めた」ということと、今では当たり前なんですけど、「こんな大学を作りたい」と候補者にプレゼンをさせたそうなんです。今から見ると相当な先見の明をお持ちだったなと思います。あまり公にはされていないことで、大学を去った後に少し聞かせていただいたんですが、例えば教員でも特定の大学出身者が三分の一を超えないようにされたそうで、大派閥を作つてというトラブル防止にもなりましたが、一方で私たちは様々な大学出身の先生方に非常に熱心に教えてもらえたんですよ。ずっと大学で教育に携わっているからこそ、こういう愛媛大学のような組織は珍しいと感じます。

自学出身者だけにしないで欲しい、ということではないのですが、母校にもそういう時代があったということは伝えておきたいです。



柳瀬 当時は、学生たちも自由にいろんな教室を出入りしていましたが、どの教室にもずっと学生がいるような状況でした。

樋田 基礎にも1割以上の学生が進みましたし、基礎と臨床の行き来も制度上容易でした。今はなかなかそういうことは出来なくなりました。

立石 教室などでもよく先生とお酒を飲んだりしていましたが、今ではそういうことも出来なくなっていましたね。

鍋加 僕らの頃でも医学祭でお酒を飲んだりしていましたが、今はとにかく学内で飲むこと自体が禁止ですね。

立石 お昼から飲んで紅茶にはウイスキーが入っているとかが言われていた先生もいましたね。

山本 授業中にも関わらず、「同級生を連れて来い」といわれ、お酒を飲みに行かれたこともありました。

鍋加 今の時代の教員と学生の距離感はまた違う難しさがありますね。

柳瀬 細菌学の先生たちとソフトボールをしていて、精神科と試合をする時は助っ人で出ることもあったんですが、勝負師の内海先生(当時の細菌学教授)は勝負にこだわる方で相当なプレッシャーでした。

樋田 大会の時は酒代を賭けてやっていたですね。負けの方が勝った方におごるということ。

柳瀬 上原先生は釣りもお好きでしたね。

樋田 私なんて、「授業辞めて釣りに行くから運転して行け」と言われたこともありますね。今やると大変なことになりますよね。今から授業行こうとしている学生を捕まえて、運転させるんですから。あの時代だから出来たことですね。

鍋加 最後に、大学や同窓会に対する要望、後輩たちへのメッセージをお願いします。

武田 私は愛媛にいますので、愛媛大学の卒業生が県内に増えるのは嬉しく思っています。これから頑張っていたきたいですね。また、愛媛の地域医療はもちろんですが、先端医療といいますか、医学研究にも貢献していただきたいと思います。

柳瀬 外に出てしまうと、なかなか同窓会と関わる機会がないんですけれども、同窓会報は送られて来たら必ず最初から最後まできちんと読んでいます。すごく懐かしい方も出てきますし、後輩の方でも第一線で活躍されているのを知ることが出来ますから、是非、同窓会報を続けていただきたいと思います。

樋田 今はLINEで繋がればやり取りは出来ますが、皆さんお忙しいのでなかなか同窓生とのコミュニケーションは難しいので、柳瀬先生がおっしゃるように同窓会報で「こんなにいろんな教室があるんだ」とか、「だいたい先生方も変わられたな」とかいろんなことを知ることが出来るので、是非、続けていただきたいですね。後は、研修の案内とかもそうですが、大学を卒業してしまうと外からはなかなか様子が見えないので、教育や研究の状況も同窓会報などを通じて教えていただけると嬉しいです。

立石 医学部内には同窓会の場所があるんでしょうか？

鍋加 同窓会室があって、今計画している新しい会館が出来たらそこに移る予定です。

立石 なるほど…。医学部のほうに仕事や用事がなくても、そういう場所があるよってお知らせしてもらえると「近くに寄ったから行ってみよう」となるとと思います。

鍋加 今計画中の同窓会館ができれば、それこそ「ぜひ見に来て下さい」とお知らせが出来るとと思います。

立石 さらに写真コーナーとか、何か当時のことが分かる展示とかもあると嬉しいですよね。

鍋加 おそらくですが、皆さんから寄贈いただいて、展示コーナーのようなものを作ることになると思います。

山本 臨床研修の管理委員をやらせてもらっていると、最近はかなり卒業生が県内に残ってくれているんですね。地方枠もあるので、9年間はいてくれるということもありますが、今は7～8割は残っているようです。ただ、そこから年齢が上がると実際にどの程度県内に残っているかということとはわからないんです。実際、同窓生がどのくらい県内に残っているか、ということが分かると助かりますね。

鍋加 そうですね、臨床研修センターでは臨床医がどの程度残っているかは把握していると思うんですが、その後のことは分からないと思います。

山本 そういうことは同窓会で把握した方がいいのかもしれないと思いますね。

鍋加 同窓会報の送付先についても届かない方もいて、動向が分からなくなってしまうこともあるので、どうやって同窓会報を皆さんに届けるのか課題ではあります。7期生の皆さんはグループLINEなどの連絡手段はお持ちでしょうか？

樋田 何かあった時に、それぞれで連絡先を交換している方はいますが、全体の連絡手段はないですね。

柳瀬 世話をする人がいないですよ。

鍋加 各学年に幹事がいると同窓会からの連絡も取りやすいんですけどね。

立石 愛媛の現状を見ていると、だいたい愛媛大学出身の医師も増えて嬉しいと思うものの、東予・中予はいいんですが、南予地域の医療現場には人手不足がありますよね。例えば、西予市の町立野村病院が縮小するという話もあって、医師だけの力ではどうにもならないかもしれません、地域の医療崩壊を防ぐということも大事かと思うので、同窓会で何が出来るかわからないのですが、そういうところも頑張りたいと思っています。

鍋加 南予はいつも話題に上りますよね。昔と違って、交通事情もよくなりましたし、宇和島あたりでの研修は若い先生もかなり行ってくれます。ただ、それが終わるとどうしても中予に戻ってしまうので、そのまま南予で医師を続けることには至っていないんですね。自治体も努力はしていて、今の学生は南予に行く機会自体は多くなっています。

山本 現役の学生たちにも同窓会の情報を伝えて、こんな先輩ドクターがいるんだということを知って欲しいですね。学生や若いドクターは典型的なキャリア像はあると思うんですが、いろんなキャリアモデルがあるという意味でも先輩たちの情報を伝えてあげて欲しいです。そして、愛媛はもちろん、日本や世界へと飛躍する人になって欲しいと願っています。

鍋加 たっぷりとお話を聞かせていただき、皆さん有難うございました。



海外医療研修に参加して

■ 加来 竜船 (6年生)

(前列左から3番目)

2024年7月8日からの1週間、台湾の高雄医学大学にて小児科の臨床実習をさせていただきました。交換留学はコロナ禍明け後初だったため不安なことも多かったですが、日本好きな現地の学生が出発前から連絡をくれ、最寄り駅への迎えや学校の案内、寮の部屋の掃除など、サポートしてくれ心強かったです。

実習ではPICUとNICUを回らせていただき、外来や回診を中心に見学しました。先生は患者さんの状態を説明してくださり、質問にも丁寧に答えてくださりました。病院内はかなり自由な雰囲気、会議にパートナーを連れてくる医師や、いつでもスマホで調べられ患者と好きに接していい実習生など、日本との違いに大変驚きました。朝が早い分昼休みが長く、班員でランチを食べに行きその後昼寝をする生活も斬新でした。

実習後は現地の学生がごはん・海・山など各所へ連れて行ってくれました。現地の先生や学生との交流はかけがえない財産になりました。この貴重な経験を今後の医師人生に活かせるよう励んでいきたいです。

最後になりましたが、お世話になりました先生方、国際化推進室の方々、ご支援いただいた同窓会の方々に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



■ 田尾 瑞季 (6年生)

(右から4番目)

2024年7月1から7月12日の2週間、台湾の高雄医学大学の整形外科にて臨床実習をさせていただきました。新型コロナウイルスの影響で4年ぶりの開催となり、直前まで不安なことが多かったですが、出発前から現地の学生のサポートがあり、大変心強かったです。

整形外科では、主に手術と外来の見学をさせていただきました。整形外科だけで1日20件を超える手術が行われており、術野に入る機会も与えていただき、そこでは日本での実習経験が大変役に立ちました。手術室での学生の電子機器使用や自身のパソコンからも電子カルテにアクセスが可能と聞き、日本との大きな違いを感じました。2週目には、台湾のナショナルトレーニングセンターに連れて行ってもらい、実際にアスリートの外来診療を見学させていただきました。台湾は日本の味の素ナショナルトレーニングセンターを手本にして建設されていると聞いて、大変興味深かったです。

最後になりましたが、今回の留学にあたりご支援とご尽力いただいた国際化推進室の方々、現地の先生方、学生さん、同窓会の皆様に感謝申し上げます。この貴重な経験を胸に、今後の医師人生で自分にできることをしっかり考えてまいりたいと思います。



■ 中村 優花 (6年生)

(前列左から3番目)

私は、2024年7月7日から1週間、台湾の高雄市にある高雄医科大学の皮膚科で臨床実習をさせて頂きました。

皮膚科の実習では、主に外来見学や処置見学、回診を行いました。実習を通して実際に台湾の医療を自分の目で見たり、現地の医学生と話をしたりすることで、日本と台湾の医療、教育の共通点、相違点を知ることができました。基本的な治療方針はほとんど同じでしたが、清潔やプライバシーの概念、学生の実習形式、病院の設備など、日本のそれとは違う部分を実感しました。また、現地の医学生に台湾の伝統料理のレストランや屋台に連れて行ってもらい、異文化を体験するとともに、現地の医学生と交流を深めました。台湾という、異なる環境で、医学を学ぶ人と交流できたことは、自分の人生においても大きな財産になったと感じています。この実習を通して、医療という共通のものを台湾からという違った目線で見ることができ、自分の視野を広げることができました。

最後になりましたが、今回海外臨床実習という貴重な機会を頂き、ご尽力いただきました先生方、国際化推進室の皆様、またご支援いただきました同窓会の方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



■ 野村 珠優 (6年生)

(右端)

2024年6月30日から7月13日までの2週間、台湾の高雄医学大学の整形外科で臨床実習をさせていただきました。

実習では、現地の医学生と一緒に手術や外来の見学、レクチャーを受けました。留学生が来たという理由で講義が全て英語で行われたことにまず驚き、さらに台湾の学生・先生方が全員英語を話し、カルテを英語で書いていることにも驚きました。

一番印象に残っていることは、同じ手術を受けた患者さん4人のフォローアップ外来を同時に行っていたことです。一度に4人の患者さんが診察室におり、診察やリハビリの説明等が一括で行われておりました。患者さんのリハビリのモチベーションにも繋がり、台湾では誰でも自由に大学病院を受診できるため、膨大な量の外来業務を行う上でも非常に効率的であると感じました。

また、高雄にある、ナショナルトレーニングセンターの外来も見学させて頂き、トップレベルで戦う選手のケアとスポーツ医学について学びました。

現地の医学生や先生方が本当に暖かく迎えてくださり、非常に充実した2週間でした。今回、貴重な機会を頂戴するあたり、ご支援・ご尽力頂きました先生方、国際化推進室の皆様、藤本さん、同窓会の皆様に心より感謝申し上げます。



■ 柴崎 瞳 (3年生)

(中央)

2024年8月19日から23日の約1週間、ハワイ大学医学部 (John A. Burns School of Medicine) にて研修をさせていただきました。

PBL・英語での問診・身体診察・マネキンシミュレーション・注射実習などを経験させていただきました。PBLは、現地の医学生や他大学の医学生とグループになり、ディスカッションをしながら臨床推論を進めていきます。私は初めて経験しましたが、英語でのディスカッションはとても楽しく刺激を頂きました。聴診等の診察技術も教えて頂き、模擬患者様をお相手に英語での問診・診察も経験させていただきました。マネキンシミュレーションでは、刻一刻とマネキンの状態が変化するので、判断力と周囲との連携の重要性を実感致しました。

授業の後にも現地の医学生や他大の医学生と様々な交流がもて、毎日があっという間でした。現地の先生方や医学生の方々の温かいおもてなしには感謝の気持ちで一杯です。

この研修で経験させて頂いたこと、学ばせて頂いたことを、これからの勉学に活かしていきたいと思います。出発に向けてお忙しい中ご指導してくださった先生方、様々なサポートをしてくださった国際化推進室の皆さま、ご支援いただいた同窓会の方々、本当にありがとうございました。



■ 清水 杏実 (5年生)

(左から5番目)

私は2024年8月19日から23日の約1週間、ハワイ大学医学部でProblem Based Learning (PBL) 研修に参加させていただきました。

PBLの内容は、提示された症例に対して、必要な問診や診察、検査、仮説、鑑別診断、追加で学習すべきことを挙げるというものでした。PBLの中では自分が学習したことを発表する時間が設けられており、プレゼンテーションを構成する力や英語で説明する力が向上することを実感しました。Manikin simulationでは、救急の対応を学びました。他大学の学生と、自分たちの対応で何が足りていないかを話合うことで、チーム医療のあり方を学ぶことができました。Standardized patient examでは、模擬患者さんに対して問診や身体診察を行いました。非常に緊張しましたが、初めての英語での問診や身体診察は貴重な経験となりました。

また、1週間の滞在期間でハワイ大学の学生や日本の他大学の学生とたくさん交流することができ、かけがえのない仲間を作ることができました。

最後に、今回の研修にご尽力をいただきました先生方、国際化推進室の皆様、ご支援いただきました同窓会の皆様に心より御礼申し上げます。今回の研修での学びを今後の活動に活かし、よい医療従事者となれるよう、さらに精進いたします。





私は2024年8月19日から23日までの約1週間、ハワイのJohn A. Burns School of Medicine (以下JABSOM) での研修に参加させていただきました。3月にも同研修に参加させていただいており、2度目の貴重な機会でした。模擬患者さんを相手に禁煙指導を行ったり、JABSOMの学生さんも含めたグループで臨床推論やプレゼンを行ったりと、今回も大変充実した内容で学びが多かったです。

前回と比較し、自分自身の成長を感じた部分も、まだ伸ばせると感じる部分もあります。研修で受けた刺激を糧に、今後も広い視野を持って医学や語学の学習に励みたいと思います。また、これらの経験を他の方々に伝え、興味や関心が高まることを期待しています。

短い期間でしたが、JABSOMおよび日本全国から集結した他大学の学生さんと交流を深められたこと、ハワイの文化や自然に触れられたことは、私の人生においてかけがえのない経験です。JABSOMの皆さんからいただいた温かい歓迎をお返しできるよう、今後、JABSOMと愛媛大学医学部の交流がさらに深まることを願っています。

最後になりますが、事前準備や勉強会にご尽力いただいた先生方、国際化推進室の皆様、そして、ご支援いただいた同窓会の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

医学祭を終えて

第46回愛媛大学医学祭実行委員長 **重森 健**

(医学部医学科4年)



今年は5月18日、19日の2日間に渡り第46回愛媛大学医学祭を開催させていただきました。19日は天候が危ぶまれましたが、なんとか持ち堪え、2日間予定通りに開催することができ大変嬉しく思います。

まずは、医学祭の開催にあたり、教職員の方々、近隣住民の皆様など多くの方々のご支援をいただきましたこと、厚く感謝申し上げます。

さて、今年の医学祭は「Real」というテーマを掲げ準備してまいりました。このテーマには学生たちの普段の活動を

「ありのまま」、ステージ発表やサークルバザー等で見せてほしいという思いを込めました。医学祭当日は学生たちの「ありのまま」の姿を見ていただけたのではないのでしょうか。

サークルバザーでは行列ができるほど大盛況したサークルもありました。ステージ発表では普段の活動の成果を存分に発揮してくれて大変盛り上がりました。その他、ゲストライブをはじめとする各企画もたくさんの方々に足を運んでいただき心から嬉しく思います。

最後にこの2日間、特に大きな問題もなく無事医学祭を終了することができたのは多くの方のご支援、ご協力があつたからだと感じております。第46回愛媛大学医学祭にご協力してくださいました皆様方に実行委員一同、心より感謝申し上げます。

2024年度同窓会役員

役 職	氏 名	卒業年(期)	所 属
会 長	鍋 加 浩 明	H16 (26)	松山大学 薬学部 医療薬学科
副 会 長	須 賀 義 文	H16 (26)	須賀クリニック 消化器内科・婦人科
	中 林 ゆ き	H26 (36)	法医学
常 任 幹 事	藤 山 幹 子	H元 (11)	四国がんセンター 皮膚科
	日 浅 陽 一	H 2 (12)	消化器・内分泌・代謝内科学
	西 村 隆	H 4 (14)	附属病院 循環器病センター
監 査	檜 垣 高 史	S63 (10)	地域小児・周産期学
	吉 田 素 平	H11 (21)	消化管・腫瘍外科学
幹 事	上 甲 康 二	S56 (3)	済生会西条病院 内科
	大 谷 敬 之	S63 (10)	星の岡心臓・血管クリニック
	羽 藤 直 人	H元 (11)	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学
	熊 木 天 児	H 7 (17)	附属病院 総合臨床研修センター
	濱 田 信	H 7 (17)	四国がんセンター 感染症・腫瘍内科
	山之内 純	H 7 (17)	附属病院 輸血・細胞治療部
	鈴 木 純	H 8 (18)	附属病院 医療安全管理部
	白 野 倫 徳	H14 (24)	大阪市立総合医療センター

事 務	池 内 佳代子	
-----	---------	--

「2024年8月末日時点の役員」

17期生同期会 報告

愛媛大学医学部創立50周年記念として、2023年10月8日に第17期生同窓会が開催されました。今回は徹底的に連絡先を更新することを目指し、92名と連絡を取ることができ、42名が参加しました。前回は平成26年8月8日に松山全日空ホテルで開催され、同窓会会報No.31において「卒業25周年記念同窓会のお知らせ 日時：平成32年8月8日 場所：全日空ホテル？」を告知しました。しかし、平成32年8月は存在せず、しかもコロナ禍でした。元号が平成から令和に変わっていたのです。松山全日空ホテルもANAクラウンプラザホテルへ。そして、コロナ禍に新たに3名の教授が誕生していました(鹿児島大学神経科精神科中村雅之先生、愛媛大学救急科佐藤格夫先生と愛媛大学総合臨床研修センターの私)。



世の中は移り変わりゆくのに、同窓会は時を止めてくれる貴重な時間です。学生時代のバカな話、たわいもない話、時間を惜しむように2次会に28名が流れました。3次会も開催されましたが、私自身は爆睡してしまいました。同窓会会報No.28によると、12年前は夜中3時まで元気に語り合っていました。やはり、時間は動いているようです(笑)。

最後に、コロナ禍で延期が続き、漸く開催にこぎつけることができて感無量でした。同期の皆さん、次回は卒業30周年記念同窓会で会いましょう！

(文責 熊木天児 @ 万年幹事)

追伸：最も母校に残った第17期(80%)では、その他に10人前後のプチ同窓会(大学やがんセンター勤務が中心の牛渕会、某講座同門会に合わせたゲリラ集合など)が開催されており、努力すれば同窓会から援助の得られる20人はすぐにでも集まります。以前は4年以上の間隔であれば10万円の援助を受けれるものでした。しかし、同窓会開催を促すために現在では2年以上の間隔で5万円の援助を受けられます。皆さんも定期的に同窓会を開催しましょう！

(文責 熊木 天児)

26期生同期会 報告

愛媛大学医学部26期生同期会を2023年10月8日(日)に道後山の手ホテルで開催しましたので報告させていただきます。我々は卒業臨床研修が必修化された初年度の平成16年卒業となります。卒業20年目ともなると開業している同級生も増え、県外から土曜日勤務後に参加したいという要望に応え、医学部創立50周年記念式典の翌日、3連休の中日に開催日を設定しました。その甲斐あって日本全国のみならず海外からも参加があり、30人もの同期生が集まってくれました。国境なき医師団からの帰国直後にサプライズ参加してくれた同期生もありました。卒業以来会っていない同期生も多く、意外と20年前と変わらぬ姿に驚きました。会の中で、一人ずつ近況報告をしてもらい、涙あり笑いありで楽しいひと時を過ごせました。



二次会へはタクシーが捕まらず、道後から大街道へは路面電車で移動しました。遠足というには皆歳を取りました。お店は臨床1講義室(現40周年記念講堂)よりもよく通った花いちもんめ。20年前と変わらぬ店構えに昔を思い出して更に盛り上がりしました。

COVID-19流行によりしばらく会合ができない期間が続きましたが、久々にこのような楽しい集まりを開催できるようになり嬉しく思います。同期生との連絡も以前はメールやFacebookが中心でしたが、今回はLINEグループでの参加表明が中心となりました。次回は2年後の開催を予定しております。連絡方法についてはまた考えていきますのでよろしくお願いします。

(文責 鍋加 浩明)

7期生同期会 報告

2023年11月4日(土)、第5回同窓会(昭和54年入学または昭和60年卒業の集まり：総勢136名)を、道後山の手ホテルで開催しました。第4回は2017年9月に41名の参加を得て京都で開催され、3年後の2020年に松山で開催される予定でした。しかし、コロナ禍のために3年の延期を余儀なくされ、6年ぶりの開催となりました。



季節外れのインフルエンザが全国で流行する中、関東や中部・京都・中国・四国・九州などから26名が参加しました。会場へは、宮川(美濃)直子さんが弾くピアノの音色に迎えられました。代表幹事の有田から開会挨拶の後、中野・堀内君によるZUMBAによって開宴となりました。出席者全員から3分間スピーチをしていただきました。卒業アルバムの写真を投影した後に、約半数の方からパワーポイントを用いて、卒業後の歩みや自分の趣味、山登りで見つけた花や旅先の一コマ等を交えてプレゼンしていただきました。多くの方が3分を超過して熱弁したため、終宴が会場の終了ギリギリになってしまいました。今回、新しい試みとして7期生同窓会のLINEグループを作成しました。参加者が撮影した写真をLINEアルバムに共有しました。

二次会は、「飛鳥乃湯泉」の近くのBarを貸し切りにし、20名の参加で、夜遅くまで、楽しく、大いに盛り上がりしました。

懐かしく、楽しい同窓会となり、参加者一同、元気に帰路につきました。

次回は、木原康裕君が代表幹事で、関東で開催される予定です。

幹事：有田孝司・奥野博・木原康裕・西尾佳晃・丸高雅仁・廣瀬(玉井)浩美・東野博・渡邊興次

(文責 有田 孝司)

第22回愛媛大学医学部同窓会東日本支部総会報告

愛媛大学医学部東日本支部同窓会は1月27日(毎年第4土曜日恒例)にZOOM開催。

辰年の本年は、元日より震災や複雑事故が起こる不安な年初めであったが、3名の特別講演に約20名の同窓生が参加。残念なことに、COVID-19以降は7期までの先生方の参加が激減。

総合司会は26期生の黄世捷先生(聖マリアンナ医科大学 医学教育文化部門准教授)で手際よい快適な運営。

特別講演1の座長は、獨協医科大学総合診療医学・総合診療科主任教授の26期志水太郎先生でコロナ外来の途中に担当。講師は同期生尹玲花先生(医療法人社団mammaria理事長)でタイトルは「開業医になって感謝する愛媛での出来事たち」。尹先生は乳腺外来クリニックを3店舗経営。この根底は阪神大震災で被災してお母様を亡くされて医師を志した遅しさがありません。医学生時代には「あいTV」などのパートで授業料と生活費を稼ぎ、300万円の貯金を片手に東京への就職を選択。そして今、乳がん術後で苦しむ多くの患者さん支援に乳腺外来でリハビリ治療も提供され、今後の全国展開が楽しみです。

特別講演2の座長は空手部後輩の酒向が担当。愛媛大学医学部一有名な3期生高田清式先生(愛媛大学病院地域医療支援センター特命教授)が「愛媛大学病院の現在と私」を語る。大学病院の開院時や花の医学部学生生活時代、今後の大学病院の増築のお話など。いつまでもお元気でご活躍頂きたいです。

特別講演3は、関西医科大学心臓血管外科学講座主任教授ご就任の13期生小山忠明先生が「低侵襲心臓手術～愛媛大学卒業後のこれまでの歩みを振り返りながら～」を発信。座長は心臓外科学会で活躍する中村善次先生(千葉西総合病院 心臓血管外科主任部長)が学会会議の合間に担当。低侵襲心臓手術はもう100歳以上でもできる時代だそうです。愛媛大学同窓生は心臓外科領域で高名な先生を多数輩出。この仲間の存在がご自分も頑張れる源と語られた。素晴らしいです。

閉会挨拶は、本会幹事長の渡辺修一郎先生(桜美林大学 老年学教授8期生)。1期生を始め、多くの同窓生の心よりどこかの一つに本会がなれるように継続していきたいと語った。連絡ツールは、フェイスブックグループの「愛媛大学医学部医学科東日本支部同窓会」です。是非、皆さん気軽に活発にご活用ください。来年は令和7年1月25日土曜日開催。是非、御参加をお待ちしております。

(文責 東日本支部 同窓会長 酒向 正春 9期)



第3回愛媛大学医学部同窓会東海・中部支部総会報告

第3回東海・中部支部総会を、令和6年2月23日、JPタワー名古屋 名古屋市立大学(名市大)ミッドタウン名駅サテライトで開催し、23名の参加で盛り上がりしました。医学系研究科長の羽藤直人先生(11期)に來名いただき「愛媛大学医学部50年の歩みと石鐘プロジェクトについて」について、さらに三重大学医学部看護学科長の榊屋正浩先生(8期)に「単球由来線維細胞と臓器線維症および炎症性発癌の関連」についてご講演いただきました。その後、場所を変えてJR名古屋駅セントラルタワーズ12Fの「嘉鮮」で懇親会を開催いたしました。今年度も同窓生の活躍が数多くあり、事務局で把握しているだけで、富永真琴先生(6期)が、岡崎の生理学研究所をご退職後名市大で新研究室の立ち上げ、讃岐徹治先生(17期)が名古屋市立大学附属東部医療センター耳鼻咽喉科教授に、谷向仁先生(17期)が名市大看護学部教授としてご活躍です。第4回支部総会は、令和7年2月1日(土)16時から本年と同じ会場で開催し、藤田医科大学麻酔・侵襲制御医学講座の山下千鶴教授(11期)と、讃岐徹治教授の招待講演を予定しております。是非とも多くの卒業生の皆様にご参加いただけますよう、お願い申し上げます。

(文責 東海・中部支部 事務局長 大石 久史 18期)



第18回愛媛大学医学部同窓会九州支部総会報告

この度、7月12日早朝に発生した松山市清水地区(緑町)土砂災害により被災された学生の皆様・関係者の皆様に心からお見舞い申し上げます。

被災されました皆様に一日も早く平穏な日が訪れますことを心よりお祈り申し上げます。

さて、今年は愛大医学部九州同窓会を7月27日博多都ホテルの魚蔵で行いました。今年は1期生から19期生の10名と少人数でした。

1年間の経過報告、会計報告、立石憲彦先生が定年退職後愛媛に戻られたとの報告などを行い、昨年お亡くなりになりました奥田拓道先生(医学科生化学・分子遺伝学 元教授)に黙祷を行いました。奥田先生もこの同窓会で内容あるご講演をして頂いた先生でした。ご冥福をお祈りいたします。

その後、1期生の高橋先生の乾杯から宴が始まり、和気藹々と対馬のノドクロ呼子のヤリイカの活造りなどに舌鼓を打ち、来年の再会を誓いお開きとなりました。来年は7月26日の予定です。高校までの同窓会は思い出話が多いですが、大学の同窓会は卒業までの苦労話に加え、医者になってからの他科の話や意外な横のつながりなども聞け、会話の中から学べる場合があります。九州支部会は山口県から沖縄県と広範囲です。なかなか博多までは遠方とは思いますが、同窓生の参加をお願いします。

物価上昇によりホテル使用料の値上げや葉書・メールなど215名に連絡したにもかかわらず返答は63名、講演会用のホテルも確保できず、出席は上記のごとく今後の同窓会をどうするかが課題です。愛媛大学医学部九州同窓生の皆さんよろしく申し上げます。



事務局 すみい婦人科クリニック(福岡市)
愛媛大学医学部同窓会九州支部長

澄井 敬成(8期生) sumiifc@k9.dion.ne.jp
角 典洋(2期生)

(文責 角 典洋 2期)

《会員の個人情報に関する取り扱い》

愛媛大学医学部同窓会は、会員の個人情報の保護と適正な取扱いに取り組んでまいりますので、皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

1. 個人情報の使用目的

同窓会が取得した個人情報は、以下の目的に使用されます。

- ・同窓会名簿の作成
- ・定期的刊行物(会報、名簿)の送付
- ・同窓会会費徴収のための業務
- ・事務連絡及び各種文書の送付
- ・支部会の行事開催に関する事務連絡及び各種文書の送付

2. 個人情報の提供

会員から情報の紹介依頼があった場合、折り返し対応させていただきます。また、第三者からの電話照会等での返答は致しかねますので、ご了承下さい。

3. 個人情報の管理

「会員名簿」は、施錠保管しており、「データベース」は、インターネットに接続していない専用PCで独立した作業を行っております。

《次号会報原稿募集》

★同期会報告

幹事の方は、氏名、卒業年、開催予定日を開催日前にご一報下さい。(出席者の会員確認を行います。)

- 条件
1. 正会員20名以上の参加
 2. 報告文、集合写真を提出(会報原稿)
 3. 会費未納者への納入勧誘
 4. 2年に1回
 5. 卒後20年まで(20年を含む)とする

上記、5条件が満たされれば、愛媛大学医学部同窓会は5万円の援助を行います。

★学生海外研修留学報告・医学祭報告(学生会員)

学年、氏名を事前にご一報下さい。

- 条件
1. 報告文、写真を提出(会報原稿)

《会費納入のお願い》

同窓会活動は、会員の皆様の会費で支えられております。会費納入をお忘れの方は、お早めに同封の用紙にてお振り込み下さい。

郵便振替NO. 01620-0-6644
ゆうちょ銀行169店 当座預金6644
加入者名 愛媛大学医学部同窓会
入会金を含む終身会費5万円

《会員名簿の不正使用禁止》

会員名簿は、会則により会費納入者のみ、一会員一冊の配布となります。

第三者に渡り不正に使用されますと、会員に多大な迷惑がかかります。他人に譲渡しないよう、また破棄する場合も特段のご配慮をお願い致します。事務局としても最大の注意を払っておりますが、皆様のご協力をあわせてお願い致します。なお、会員名簿の再送付は致しかねますのでご了承下さい。

注)卒業生と偽り、名簿の請求や他の会員の住所照会の問い合わせ電話があります。原則として電話での問い合わせには、即答致しかねますので何卒ご了承下さい。また、不審な業者から会員の方へ直接問い合わせがある場合も十分ご注意くださいようお願い致します。

《お願い》

会員の皆様のご寄稿、ご意見及びご感想などは是非お寄せ下さい。また、会報で取り上げてみたいテーマ、企画等アイデアがございましたらご一報下さい。お待ちしております。

お知らせ

第41回

愛媛大学医学部同窓会通常総会

次回通常総会の開催予定をお知らせします。日程が8月第1土曜日に変更となりました。特別講演会も予定しております。詳細につきましては、HPに掲載予定です。万障お繰り合わせの上、ふるってご出席下さいますようお願い申し上げます。

記

日時：2025年8月2日(土) 16時～

場所：松山市内を計画中(Web視聴可能)

議題：事業報告及び会計報告、予算の承認、その他

連絡先

〒791-0295 愛媛県東温市志津川

愛媛大学医学部同窓会事務局

TEL：089-960-5989

(受付 平日10時～15時)

FAX：089-960-5989

E-mail：eusmdoso@m.ehime-u.ac.jp

H P：http://www.m.ehime-u.ac.jp/dosokai/igaku/

